愛知県版
チームオレンジ事例集

認知症supporter caravan

愛知県

はじめに

地域や職域において、認知症に対する正しい知識と理解を持ち、本人や家族に対してできる範囲で手助けする「認知症サポーター」は、これまでに全国で約 1,480 万人、愛知県で約 77 万人（いずれも 2023 年９月末現在）が養成されています。

国が策定した「認知症施策推進大綱」（2019 年６月）では、できる範囲で手助けを行うというサポーターの活動の任意性は維持しつつ、認知症の人や家族の支援ニーズと認知症サポーターを中心とした支援をつなぎ、認知症になっても安心して暮らし続けられる地域づくりの具体的活動「チームオレンジ」を 2025 年までに全市町村で取り組むこととされました。

本県ではチームオレンジの更なる推進を図るため、2022 年に県内市町村でチームオレンジとして活動する 15 市町 19 事例（2022 年３月末現在）を紹介する事例集を作成いたしました。今回、新たな事例を加え、20 市町 25 事例（2023 年３月現在）を掲載しています。

この事例集で紹介するチームオレンジは、規模（市町村全域をカバーするもの、校区や地区単位のもの等）や活動内容（普及啓発、交流、共感、困りごと・やりたいことの支援等）、成り立ち（認知症カフェやサロン等の既存の資源の活用や講座受講者の有志たちによる活動、本人や家族の想いの実現等）など、それぞれの地域に応じて非常に多様であり、幅広い活動が展開されていますが、いずれのチームも認知症になっても住み慣れた地域で希望を持って日常生活を過ごしていくことが目指されているのではないかと思います。

この事例集がチームオレンジの整備や運営、活動等の参考になれば幸いです。

２０２３年１１月　愛知県福祉局高齢福祉課
地域包括ケア・認知症施策推進室

目次

（※）2023 年 11 月追加事例

＜事例の構成について＞ ・・・・・・・1

【一宮市】みんなでつくる　すまいるかふぇ（※） ・・・・・・・3

【瀬戸市】オレンジサポーターと認知症当事者が活躍できるまちづくりの推進 ・・・・・・・9

【碧南市】オレンジサポーター、認知症のご本人、ご家族などが仲間として集う「交流拠点」 ・・・・・・・19

【安城市】認知症サポーターが活躍できるための仕組みづくり ・・・・・・・25

【西尾市】劇団「うなぎのねどこ」（※） ・・・・・・・31

【犬山市】コミュニティみんなで地域を支えよう ・・・・・・・35

【犬山市】共感の場づくり ・・・・・・・41

【常滑市】笑顔で活動・地域へ広がる支援の輪 ・・・・・・・45

【江南市】チームオレンジにおける地域活動の推進（※） ・・・・・・・53

【小牧市】笑顔でつなぐみんなのカフェ ・・・・・・・59

【新城市】認知症の方に優しいまちづくりのために活動しています（※） ・・・・・・・65

【東海市】サポーターも楽しんで活動、活躍を！ ・・・・・・・69

【大府市】認知症サポーター養成講座を受けたボランティアが活躍　・・・・・・77

【尾張旭市】尾張旭市認知症カフェ「かたろ～な」を拠点とした認知症予防啓発活動
・・・・・・81

【岩倉市】いわくら認知症ケアアドバイザー会による認知症啓発活動について
・・・・・・87

【豊明市】おたがいさま活動（暮らしの困りごと支援）　・・・・・・91

【豊明市】キャラバン・メイトとともに歩む希望の居場所づくり　・・・・・・97

【北名古屋市】「向こう三軒両隣」の心で、できる範囲でのご協力、助け合いをさせていただきます！　・・・・・・101

【みよし市】グランドゴルフを継続してできるように協力し合う（※）　・・・・・・105

【東郷町】誰もが参加しやすいサロン　・・・・・・109

【東郷町】誰でも気軽に参加することが出来るサロン　・・・・・・113

【蟹江町】誰もが役割を持ち、人がつながりあえる場所　・・・・・・117

【東浦町】オレンジパラソルによる認知症予防啓発運動　・・・・・・123

【東浦町】ひだまりカフェ（認知症カフェ）のお手伝い　・・・・・・127

【東浦町】認知症当事者とオレンジサポーターによる社会参加活動（※）
・・・・・・131

＜参考＞　・・・・・・137

本事例集には、以下の２種類をチームオレンジとして掲載しております。

①「チームオレンジの三つの基本※」を満たすもの

②三つの基本は満たさないものの、本人・家族のニーズとステップアップ講座を受講した認知症サポーターを中心とした支援をつなぐ仕組みが構築されているもの

※チームオレンジ三つの基本（全国キャラバンメイト連絡協議会発行「コーディネーター研修テキスト　認知症サポーターチームオレンジ運営の手引き」から抜粋）

（１）ステップアップ講座修了及び予定のサポーターでチームが組まれている。

（２）認知症の人もチーム員の一員として参加している。（認知症の人の社会参加）

（３）認知症の人と家族の困りごとを早期から継続して支援ができる。

＜事例の構成について＞

チームオレンジ取組事例【〇〇市・□□町】
【チーム名】（　　）
【タイトル】（　　）

チームによっては、チーム名をつけていないものもあります。
タイトルには、チームの活動や特徴を一言でまとめたものを記載しています。

1．自治体情報	
（1）人口	
（2）高齢者人口	
（3）高齢化率	
（4）面積	
（5）日常生活圏域	
（6）地域包括支援センター数	

ここには、自治体の基本情報（人口や高齢化率、地域包括支援センター数等）を記載しています。

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	
（2）活動実施主体	
（3）活動内容	
（4）活動頻度	
（5）利用料金	
（6）運営財源	
（7）連携する機関等	
（8）メンバー（チーム員）構成	
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	
（10）チームオレンジの類型	

ここには、チームオレンジの活動の概要（活動実施主体や活動内容、メンバー構成、チームオレンジの類型※を記載しています。
※チームオレンジの類型については、＜参考＞P137-138 参照。

3．活動の立ち上げの経緯と経過

ここには、活動を開始するまでの経緯（地域課題の状況、問題意識、きっかけ、関係機関への働きかけや調整、チームオレンジコーディネーターの役割、チームオレンジの元となる活動や取組等）と現在までの経過を記載しています。

4．活動内容

ここには、活動の内容について写真や図なども使用しながら記載しています。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

ここには、コロナ禍での活動の実施や生活支援コーディネーターとの連携、活動が軌道に乗るまでの試行錯誤、認知症サポーターへの働きかけ等を記載しています。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

＜課題＞

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

９．ここがポイント！

ここには、自治体で活動しているチームオレンジの特徴やアピールしたい点などを記載しています。

＜愛知県から＞

ここには、事例の概要や特徴などの県からのコメントを記載しています。

チームオレンジ取組事例【一宮市】
【チーム名】（オレンジスマイル萩）
【タイトル】（みんなでつくる　すまいるかふぇ　）

1．自治体情報（2023 年7月 31 日現在）	
（1）人口	379,538 人
（2）高齢者人口	103,420 人
（3）高齢化率	27.2%
（4）面積	113.82 ㎢
（5）日常生活圏域	6 圏域
（6）地域包括支援センター数	7 箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年 6 月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他 （　　）
（3）活動内容	認知症カフェ運営、認知症普及啓発のサポート
（4）活動頻度	月１回
（5）利用料金	２００円
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他 （　　）
（7）連携する機関等	市内認知症地域支援推進員、認知症初期集中支援チーム、隣接市地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、グループホーム
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：13 人 （認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員を除く） ＜以下、チームを構成する属性を記入＞ 認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員、特別養護老人ホーム職員（介護職、調理員、事務職、ケアマネジャー）、グループホーム介護職員、デイサービス職員、ボランティア、居宅介護支援事業所ケアマネジャー
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	地域包括支援センター（委託）

（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※参考参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

- 令和２年、地域包括支援センター萩の里の母体である高齢者施設の職員全員を対象に認知症サポーター養成講座を開催した。
- 受講者全員に事後アンケートを実施し、「地域でも認知症普及啓発をしたい」等の記載が複数名からあったため、地域包括支援センターと一緒に地域づくりをできるボランティア募集を行い、14 名の応募があった。
- ボランティアメンバーで毎月会合を行い、メンバーそれぞれがやりたいこと、できることを意見交換し、活動内容やチーム名を検討した。メンバー全体の取組みとして、認知症カフェの開催、個々のスキルアップのためステップアップ研修を受けたいとの意見が出た。
- メンバーは令和３年～令和４年にかけ、ステップアップ講座として認知症当事者、認知症初期集中支援チーム、ワーキングデイサービスからの講話を認知症地域支援推進員が調整し受講した。
- 認知症カフェについて、地域包括支援センターが関わる認知症当事者や家族のエピソードを情報共有し、「みんながホッとできる場所をつくりたい」との思いで内容の検討等を行った。
- コロナ禍にあり既存のカフェにメンバーが見学に行くことができず、認知症地域支援推進員が見学した内容を共有したり、隣接する市のステップアップ講座や認知症カフェの立ち上げをする団体の会合に参加し情報共有を行った。
- コロナ禍でカフェの開催ができない中でも、カフェのネーミング選定、テーマソングの検討、体操の考案や内容の検討などを行った。

オレンジスマイル萩のロゴマーク⇒

４．活動内容

【認知症カフェ(すまいるかふぇ)】

- 毎月第２土曜日 13：30～15：00　に開催。
- 令和４年度は感染状況により２回の開催に留まった。開催ができない間もメンバーで月１回の会合を継続した。
- 当事者や家族にカフェにどのようなことを求めているか等の意見を確認したり、メンバーが目指すカフェの在り方を毎回話し合いしている。

レクリエーションの様子

交流会

すまいかふぇ看板

【認知症の普及啓発】

・地域包括支援センターが様々な地域や企業とのイベントで認知症の普及啓発活動をおこなうことがある。参加者や来場者に粗品を渡したいことを認知症地域支援推進員がメンバーに相談し、賛同したメンバーが素材提供、粗品づくりに協力をしてもらっている。メンバーからの発信で法人職員に協力者が増えている。

【メンバーから地域包括支援センターへの相談】

・メンバーが、認知機能低下を来して困っている高齢者とその知人に遭遇した際、相談先を知らず困っており地域包括支援センターへ連絡をしたり、支援に早期に繋ぐことができた。

5．活動を進めていく上での工夫・配慮

【活動への工夫】

・メンバーの参加は強制しない。できる範囲で活動をしてもらうこととし、小物づくりが得意な人、カフェのドリンク準備など裏方でも協力してもらえるように声掛けをしている。
・法人を退職してもメンバーとして活動してもらえるか意向を確認し、継続参加意向のメンバーには活動に参加してもらっている。
・都合が合わず、なかなか参加ができないメンバーにも毎月顔を合わせて話す機会をできるだけつくり、カフェの現状を伝えたり意見を確認したりしている。カフェの在り方だけでなく、取り組みたいことや研修を受けたい内容等を確認している。
・メンバーと一緒につくりあげるチームを意識し、何かを決定する時には意見交換をしたり、投票を行ったりした。
・本人や家族が置き去りにならないよう、地域包括支援センターで支援している当事者や家族、以前から付き合いのある若年性認知症当事者の方とも適宜相談をしながらメンバーと共有するようにしている。
・グループホームの入居者の方に、レクリエーションで使用する素材や看板の飾り等の作成協力をしてもらっており、「認知症になってもできることはある」ことを知ってもらためカフェの中で参加者にも紹介している。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・ステップアップ研修はコロナ禍でカフェ開催ができない期間を利用し１～２か月に１回開催していた。

・現在はカフェが本格稼働しているため、メンバーのステップアップ研修がなかなか開催できていないが、メンバーが研修を受けたいと希望している内容があるため今後も予定していく。

・カフェに限らず認知症関連の情報をメンバーに提供し、ステップアップ講座を受講するきっかけづくりにしている。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・カフェの中では参加者をあまり「お客様」として丁重に扱い過ぎず、運営者も参加者も大きく区別せず、それぞれができることを手伝ってもらうようにし役割を持ってもらうようにしている。

・認知症カフェ終了後、互いに良かった点や気を付けた方が良かった点など毎回振り返りをおこなうようにしている。

・認知機能低下のある方など引きこもりがちになっていたり、家族が気分転換を必要としていたりカフェ参加の必要性がある方を中心に、外出のきっかけづくりや地域と繋がりが保てるように声掛けをしている。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・専門職も参加しているため、参加者が相談したいことやメンバーが対応に困ったことなど相談に応じるようにしている。

・個別相談という程ではないが、知識を得たいという家族の参加もあるためレクリエーション後の茶話会の際に情報提供をしたり、意見交換ができるようにしている。また振り返りの際にどのようなことに悩んでいたか、どのようなことに関心を持っていたか等を共有している。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・カフェに参加されている認知症当事者は「自分で頑張って取り組んでいることをみんなに知ってもらう良い機会になっている」、家族は「家族同士の交流や意見を知りたいと思っただけだったけど、レクリエーションに参加したり、雑談をすることで気分転換になっていて楽しい」と楽しみに待ってくれている人がいる。それを聞くことでメンバーのモチベーションに繋がっている。

・活動が広まるようにメンバー同士が声をかけあったり、メンバーではない人にも協力依頼をしてくれており活動の輪が少しずつ広がっている。

＜課題＞

・認知症カフェに参加したくても移動手段がない、バスの時間が合わないとの意見がある。

・メンバーは仕事も両立しているため運営者が少ないことがある。新たなメンバーを増やしていきたい。

・カフェの内容は大まかに決めて開催しているが、包括職員が内容・チラシ作成・当日の運営を主で担うことが多く、メンバーにも負担のない範囲で役割を担ってもらえるよう打合せが必要。
・本格稼働して間もないため参加者への呼びかけを検討していく。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・認知症の相談が年々増加傾向にあり、対応で悩む家族、住民もたくさんいるため、カフェやチームでの活動を通して認知症を正しく理解し対応ができるような地域づくりを考えていきたい。
・参加者、運営者を増やしていけるよう地道に様々な場面で周知していきたいと考えている。
・移動に苦慮している参加者もあるため、送迎などに協力してもらえる支援者を発掘していく。

9．ここがポイント！

・オレンジスマイル萩は、メンバーの志が高く認知症の方や家族に自分たちに何ができるかを常に考えて行動ができる人たちの集まりです。自分たちも楽しみながら、参加してくださる方々に少しでも笑顔になってもらえるよう心掛けています。
・認知症カフェには専門職（ケアマネジャー、介護職、看護師、地域包括支援センター職員）や介護経験者などもいるため専門的な相談やピアカウンセリングにも繋げることができます。
・始まったばかりの活動であり、形式的なことに捉われ過ぎないよう、認知症当事者、家族、メンバーなどみんなで意見を出し合い一緒につくりあげていくことを大切にしています。

＜愛知県から＞
・高齢者施設での認知症サポーター養成講座をきっかけに、認知症カフェなど地域の取組へとつながっています。
・参加者それぞれが役割を持ったり、専門職がご家族の相談に応じるなど、充実した場となっています。

チームオレンジ取組事例【瀬戸市】
【チーム名】（チームオレンジせと）
【タイトル】（オレンジサポーターと認知症当事者が活躍できるまちづくりの推進）

1．自治体情報（2023 年８月１日現在）	
（1）人口	127,723 人
（2）高齢者人口	38,274 人
（3）高齢化率	29.9%
（4）面積	111.40 ㎢
（5）日常生活圏域	５圏域
（6）地域包括支援センター数	７箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2021 年４月開始（個別活動が始動）
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア ④その他（瀬戸市社会福祉協協議会）
（3）活動内容	・個別活動 ・出張！せとらカフェ♪※（プロジェクト） ・おいでんサロン（プロジェクト） ・オレンジガーデニング（プロジェクト） ※せとらカフェ：瀬戸市認知症カフェ
（4）活動頻度	・個別活動：ケースによって活動頻度が異なる ・出張！せとらカフェ♪：随時 （＋開催に伴う事前打ち合わせ：随時） ・おいでんサロン：月２回（第２・４水曜日） ・オレンジガーデニング：随時
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※上記の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）

（7）連携する機関等	瀬戸市認知症地域支援推進員（社会福祉協議会・瀬戸旭医師会）、せとらカフェ（瀬戸市認知症カフェ）、公民館や交流センター、瀬戸みどりのまち病院を始めとする市内医療機関、瀬戸の情熱伝道師※、少年院、デイサービス、市内薬局・スーパー・ショッピングセンター　等 ※瀬戸の情熱：瀬戸市で実施しているオリジナル口腔ダンス・ストレッチ
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：88 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ オレンジサポーター（60 名、認知症サポーター養成講座を受講し、その後ステップアップ研修を受講した者のうち、チームオレンジの登録を希望した者）、認知症当事者や家族、認知症地域支援推進員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

3．活動の立ち上げの経緯と経過

【瀬戸市の状況】

- 2016 年度から、認知症サポーター養成講座受講者向けのステップアップ研修を実施していたが、その後の活動支援を行っていなかった。また、認知症施策を認知症地域支援推進員が中心となって担っていたが、認知症施策の普及啓発にあたり、人手不足による事業拡大への課題を感じていた。

【立ち上げの経緯】

- チームオレンジの整備を検討するにあたり、既存のステップアップ研修受講者がチームオレンジの担い手となっていただけるように、再度チームオレンジの内容を加えた研修を実施し、受講者の中でチームオレンジの参加を希望された方にオレンジサポーターとして登録いただくこととなった。そして、2021 年４月に「個別活動」からチームオレンジの活動を開始した。
- 活動が進むにあたり、認知症の普及啓発や医療機関との連携をチームオレンジで行うことができないか、認知症地域支援推進員と行政で検討した結果、３つのプロジェクトを立ち上げることになった。

・関係機関との調整は認知症地域支援推進員を中心に進め、オレンジサポーターには関心のあるプロジェクトに参加していただいた。各プロジェクトメンバーと認知症地域支援推進員で活動内容を検討し、順次活動を開始していった。

【現在】

・プロジェクトごとにオレンジサポーター同士がＳＮＳでつながっており、連絡はＳＮＳを通して行っている。（ＳＮＳを利用できない方は電話で別途連絡。）プロジェクトの掛け持ちも可能で、複数のプロジェクトで活躍するオレンジサポーターもいる。
・今後も必要に応じてプロジェクトを立ち上げ、広くオレンジサポーターや認知症の当事者が活躍できるまちづくりを推進し、様々な機関を巻き込みながら、市全域で体制を整備していければと考えている。

４．活動内容

①個別活動

・認知症当事者の方の「やりたいこと・やってみたいこと（趣味活動等）」とオレンジサポーターの「できること」をマッチングし、個別活動をしている。2023 年８月時点で、12 件マッチングがされた。

・Ａさんの事例
＊Ａさんは独り暮らしの 80 代の女性。
＊Ａさんはデイサービス利用日以外は１日中ソファーで横になり、テレビを観て過ごしていた。おしゃべりが好きな本人とオレンジサポーターが交流できないかとケアマネジャーから相談があった。
＊そこで、Ａさんの家から一番近いオレンジサポーターのＢさんに依頼。Ａさんの家を訪問し、交流が始まった。そのうちに、コロナ禍で中止になっていた地域のサロンが再開することとなり、Ａさんと Ｂさんが一緒に参加することになった。Ａさんは地域住民と今まで通りに楽しく交流され、地域住民はオレンジサポーターがいることで安心して受け入れてくださった。
＊Ａさんも Ｂさんも共にサロンへ行くことをとても楽しみにされている。

・Ｃさんの事例
＊Ｃさんはご家族とお住いの 80 代の男性。
＊Ｃさんは免許返納後、趣味の畑に行けなくなったことで閉じこもるようになり、テレビを見てばかりの生活になっていた。その姿を見て家族が心配し「おれんじドア・せと※」に参加された。「おれんじドア・せと」の中で、Ｃさんは囲碁が好きだということが分かり、他の参加者と一緒に囲碁対局をすることとなった。しかし、対戦していた参加者が引っ越すことになり、一緒に囲碁ができる人がいなくなってしまった。

＊そこで、オレンジサポーターに相談し、囲碁のルールを知っているＤさんが、週に１回、Ｃさん宅を訪問して囲碁対局をすることになった。この活動をきっかけに、Ｃさんは朝も決まった時間に起き、カレンダーで予定を確認するようになり、とても元気になった。

＊今後は同じく囲碁ができるオレンジサポーターのＥさんも活動に加わっていただく予定となっている。

※おれんじドア・せと：瀬戸市で実施している認知症当事者同士の交流会

②出張！せとらカフェ♪

・2022 年４月から月に１回、各地域（交流センター、公民館、スーパー、薬局等）で認知症に関する講座や認知症クイズ、コグニサイズ、瀬戸の情熱（口腔ストレッチ）等、認知症の普及啓発を行っている。

アピタ瀬戸店▲

下品野地域交流センター▲

日本調剤瀬戸薬局▲

バロー新瀬戸店▲

③おいでんサロン

・医療機関を訪れる人や診断を受けた方の相談対応を目的に、2022 年３月 23 日に瀬戸みどりのまち病院のコミュニティーセンターにオープンした。

・毎月第２・４水曜日に開催しており、介護予防教室や人生会議等の専門職による講座の他に、川柳、ハンドマッサージ等、オレンジサポーターが講師となり、特技を活かした講座も実施している。また、認知症に関する相談も随時受け付けている。

「人生会議ってなに？」▲

「ハンドマッサージ教室」▲

◀　「川柳を体験してみよう」

オレンジサポーターとおいでんサロンの参加者▲

④オレンジガーデニング

- 毎年９月の世界アルツハイマー月間に向けて、認知症の啓発カラーであるオレンジ色の花を市内各所に咲かせる活動を行っている。
- 2023 年度はキバナコスモスの花の種を市民に配布し、市内各所で９月のアルツハイマー月間に花を咲かせた。また、咲いた花はオレンジサポーターが押し花にして、しおりを作成。世界アルツハイマー月間に認知症書籍コーナーの開設にご協力いただく書店（２店舗）にて、書籍を購入された方へプレゼントしていただいた。
  また、デイサービスにてオレンジサポーターと利用者がしおりを作成し、プレゼントした。
- 咲いた花から種を収穫し、来年度の活動につなげていく。

キバナコスモスの種の袋詰め▲

作成したしおり▲

瀬戸市社会福祉協議会で咲いた
キバナコスモス▶

5．活動を進めていく上での工夫・配慮

【活動を進めていく上での工夫（個別支援）】

- 本市のチームオレンジは「個別活動」から始めており、本活動が「介護サービス」にならないことに注意し、「認知症当事者のやりたいこと（趣味活動等）」に目を向け、活動することとした。活動にあたって、事前に認知症当事者とオレンジサポーターの面談を行ったり、活動が軌道に乗るまでは認知症地域支援推進員が同行している。
- 活動当初は実施方法や周知を模索していたが、対応しながら問題点を確認し、検討していった。また、周知に関しては地道に広報するとともに、オレンジサポーターや報道機関にもご協力いただいた。
- また、万が一の時のために市民活動災害補償制度で対応できるようにしている。

【活動を進めていく上での工夫（出張！せとらカフェ♪）】

- 既存のせとらカフェは開催場所が固定されており、実施できていない地域があることから、「出張！せとらカフェ♪」として、各地域で認知症の普及啓発ができるように実施している。
- 公民館や交流センターにとどまらず、地域のスーパーや薬局にもご協力いただき開催している。参加者からは「参加したかったけれど移動手段がなくて、今まで集まりに行けなかった。自分の住んでいる地域でやっていただけると参加できてありがたい。」という声もいただき、開催場所を変えて実施している。

【活動を進めていく上での工夫（おいでんサロン）】

- 活動当初に、オレンジサポーターと認知症地域支援推進員、行政でどのように進めていくか検討しており、現在のように開催することとなった。
- また、おいでんサロンはオレンジサポーターのスキルアップも目的の一つとしており、外部講師を招いたり、時にはオレンジサポーター自身が講師になったりして、講座開催をしている。

【活動を進めていく上での工夫（オレンジガーデニング）】

- 若年性認知症当事者の想いを基に畑や花壇整備を行っている「せとらカフェやすらぎ」と協働し、活動を進めている。
- また、せとらカフェやすらぎに参加している方にもチームオレンジに参加いただいており、連携を密にしながら各事業を進めている。

【サポーターへの働きかけ】

- オレンジサポーターとともに検討しながら各プロジェクトを進めており、今後は自発的にオレンジサポーターが活動できるように整備を進めていく。
- また、ステップアップ研修の後には、オレンジサポーター交流会を実施し、新たなメンバーとの顔合わせや勉強会、意見交換等を行っている。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ研修の開催する頻度や対象者について＞

- 開催頻度：地域の認知症サポーター養成講座の実施状況に合わせて開催
  2023 年度は令和６年２月ごろ開催予定
- 対象者：認知症サポーター養成講座を受講した者
- 内容（2022 年度２回目開催）
  １日目 一般社団法人ボーダーレス　山下祐佳里氏による講演
  ２日目 講座①　認知症について（接し方・意思決定支援）
  講座②　認知症施策について（チームオレンジ等）

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

- 瀬戸市役所内で実施される「せと福祉マルシェ」に認知症当事者とその家族にも参加していただき、認知症の普及啓発に尽力いただいている。
- また、「個別活動」では、認知症当事者の方のやりたいこと（趣味活動）を聞き取り、オレンジサポーターとマッチングしており、2023 年８月時点までに 12 件の活動が行われた。
- 本市の活動は当事者が参画できるよう、相談いただいた方だけではなく、他の事業（おれんじドア・せと等）でかかわりのある認知症当事者で興味がある方にもお声がけしている。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・「おいでんサロン」や「出張！せとらカフェ♪」では、参加者の中で相談を希望される方がいれば随時対応している。

・また、おれんじ・ドアや認知症介護家族交流会での困りごとの把握に加え、地域包括支援センターや居宅支援事業所等関係機関へはＩＣＴツールを活用し、連携、発信している。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・活動当初から全ての事業展開を考えていたわけではなく、実施してみて次回どうするか検討しようと考えていた。実際に活動が始まり、オレンジサポーターの熱意や力を借りながら、次々と事業を展開していくことができた。

・活動を進めていくことで、認知症の普及啓発が十分でなかったことを痛感した。チームオレンジがスタートし、認知症普及啓発にも市民の方が介入いただけることで、行政になかった視点で活動を進めていけているのではないかと感じている。

・また、本活動は様々な機関と連携するきっかけづくりにもなっており、今後も市民や企業、専門職への理解を促進していく。

＜課題＞

・オレンジサポーターが中心となって実施していただくことができるように、体制整備を進めることが必要だと感じている。

・また、医療機関との連携が不十分であるため、診断直後の対応や受診先からの紹介をいただけるように連携体制を構築していきたいと考えている。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・今後もオレンジサポーター、認知症地域支援推進員、行政はフラットな関係で協働していきたい。また、体制整備をする中で、オレンジサポーターのモチベーションを保てるように注力していく。

・現在の活動が口コミとして市内各所に広がり、市民が「認知症になっても安心してくらせるまち」だと思えるまちにしていきたい。

９．ここがポイント！

★トップダウンではなく、オレンジサポーター、認知症地域支援推進員、行政等の関係者で検討しながら各プロジェクトを進めています。

★また、当事者の想いに寄り添うとともに、オレンジサポーター自身も楽しみながら活動しています。

★オレンジサポーターグッズとしてバンダナを作成し、活動時に着用いただいています。関係者が同じものを身に着けることで、一体感が生まれ、士気の向上につながることを期待しています。

オレンジサポーターグッズのバンダナ▲

◀オレンジサポーターの方たち

＜愛知県から＞

・個別支援やスーパーや薬局などへの出張認知症カフェ、多様な講座を行うサロン、ガーデニングプロジェクトなどいろいろな場所でチームオレンジの活動が行われています。

・取組を進める中で見えてきた課題から、次の展開が検討され、様々な機関と連携しながら、サポーターとともに活動されている事例です。

チームオレンジ取組事例【碧南市】
【チーム名】（オレンジファミリー碧（みどり））
【タイトル】（オレンジサポーター、認知症のご本人、ご家族などが仲間として集う「交流拠点」）

1．自治体情報（2023 年７月３１日現在）	
（1）人口	72,546 人
（2）高齢者人口	17,373 人
（3）高齢化率	23.9%
（4）面積	35.86 ㎢
（5）日常生活圏域	６圏域
（6）地域包括支援センター数	３箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2021 年５月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	交流会（認知症本人の希望を叶える取組）
（4）活動頻度	月１回
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（市直営） ※上記の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	地域包括支援センター、グループホーム
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：23 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ オレンジサポーター（認知症サポーター）、認知症の本人、認知症の家族、地域包括支援センター職員（認知症地域支援推進員）、認知症介護指導者（グループホーム管理者）、市職員（認知症地域支援推進員）
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	市職員（保健師・認知症地域支援推進員）

（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過
・認知症サポーターの養成は 2006 年度から開始し、サポーター数は 6,431 人（2022 年９月末）。認知症サポーターの活動促進のため、オレンジサポーター（地域の認知症の人やその家族の地域生活を見守り支援するための活動に意思がある方）登録制を 2019 年７月から開始し、登録者は 159 人（2022 年９月末）。登録者数はいるものの、オレンジサポーターが活躍する主な場は認知症カフェ１箇所。そのカフェもコロナの影響により活動休止（2020 年２月から休止） ・認知症高齢者等が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる地域社会をつくるために、チームオレンジの構築も視野に入れ、認知症サポーターステップアップ研修を受講された方を対象に「オレンジサポーター交流会」の開催を案内し、2021 年５月から交流会を開始。交流会には、地域包括支援センター（認知症地域支援推進員）、認知症介護指導者（グループホーム管理者）の協力を得る。 ・月に１回、オレンジサポーターが集い、認知症について語り合い、具体的な活動等について話し合いを重ねた。交流会にサポーターの一人が家族である認知症の本人も連れて参加。認知症の本人も一緒に話し合いに加わり、回を重ねる中でメンバーは「自分たちが〇〇したいばかりではなく、本人の意見、想いを聞くことが大切である」と気付く。 ・また、話し合いの中で「ともに楽しむこと」「繋がること」「やってみること」のキーワードが出され、その初めの一歩として、本人のしたいこと「ハーモニカ演奏」「グランドゴルフ」の実現する方法を具体的に考えていくことから開始することとした。方向性が定まったところで、市職員から「チームオレンジ」について、求められる背景を含め説明。 ・７回目の交流会で「本人のやりたいこと「ハーモニカ演奏」を実現しよう　初めの一歩“音楽で繋がろう、楽しもう♪”」を開催。同時にオレンジサポーター交流会として始まったこの会をオレンジサポーター、認知症の本人、家族などが仲間として集う“交流拠点”としてスタート。 ・交流会に参加している認知症本人の希望を叶えるための具体的方法等の話し合いを続け、活動継続。 ・2022 年度にメンバーで交流会の名称を「オレンジファミリー碧」と決め、チラシも作成し活動を啓発。月１回定期的に集い、意見交換を続け、認知症本人の想いを実現することで地域とのつながりをつくることを一歩ずつすすめている。

4．活動内容

・月１回、第１金曜日に集い、意見交換し本人の希望を叶える取組を行っている。

・主な活動

＊本人のやりたいこと・やってみたいこと

＊歌、ペタボード、グランドゴルフ、ボッチャ、盆踊り等

チラシ▼

5．活動を進めていく上での工夫・配慮

・交流会での活動で毎回、意見交換ができる時間を設ける。

・交流会では繋がること、楽しむことを意識。

・他の認知症に関する事業、関係者との連携。

6．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・年に１回の開催を継続。

・認知症サポーター養成講座受講者に広報、LINE にて周知。

・オレンジサポーター登録者に個人通知。

・「オレンジファミリー碧」の参加者で受講していない方へ案内。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞
・「オレンジファミリー碧」で本人の意見、想いを聴く。
・「オレンジファミリー碧」に継続参加できるよう、開催日前に連絡。
・相談場面や他の事業等においても本人の想い、ニーズを聴くことを意識して対応。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞
・「オレンジファミリー碧」で本人、家族の想いを聴き取る。
・他の認知症関係の事業（認知症家族のつどい・本人交流会等）で想いを聴き取る。
・認知症に関する相談を受けた際に把握（様式をつくり整理、課題を把握）。
・訪問によるニーズ把握（予定）。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞
・認知症本人の想いを大切にした話し合い、活動が展開されている。
・本人の希望を叶える取組を通じて地域資源の繋がりができ、活動に広がりがでてきている。
・チーム員自ら、オレンジファミリー碧の活動を周知し、仲間づくりに努めている。
・本人、家族の望みが叶った姿、変化を目の当たりにし、チームオレンジの取組の必要性を感じられたこと。

＜課題＞
・認知症本人、家族のニーズの把握。
・認知症の人と家族の困りごとの早期から継続した支援。
・認知症本人がチームの一員として参加すること（認知症の人の社会参加）。
・地域の企業や事業者との連携体制の構築。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・認知症本人も、家族も安心した仲間と活動ができること。
・認知症の人と家族などが、いつでも訪れたりできる普段からのより所となること。
・支援する人、される人の関係を超えて、お互い様の活動となること。
・認知症であることを本人・家族が気軽に言うことができ、「大丈夫だよ」と受けとめて地域で支え合うことができる、そのような暮らしができる地域ができること。

９．ここがポイント！
・「オレンジファミリー碧」は、オレンジサポーター、認知症のご本人、ご家族などが仲間として集う交流拠点。 ・本人も家族も安心した仲間と活動する「家族のように」の想いを名称に込め、常に、認知症の本人・家族の「したいこと・困りごと」などの想いを大切に、「私たちにできること」を話し合い、それに向けて活動しています！

＜愛知県から＞

・サポーターの交流会から取組が始まり、ご本人も交えた意見交換を重ねていく中で、サポーターの「ご本人の想いや意見を聴くことが大切」という気づきからチームオレンジに発展しました。

・グランドゴルフなど実際に活動につながった例もあり、交流会での話し合いにより生まれた気づきを大切にしながら、今後も活動をしていただきたいと思います。

チームオレンジ取組事例【安城市】
【チーム名】（チームオレンジあんじょう）
【タイトル】（認知症サポーターが活躍できるための仕組みづくり）

1．自治体情報（2023 年 8 月 30 日現在）	
（1）人口	188,520 人
（2）高齢者人口	41,249 人
（3）高齢化率	21.9%
（4）面積	86.05 ㎢
（5）日常生活圏域	8 圏域
（6）地域包括支援センター数	8 箇所

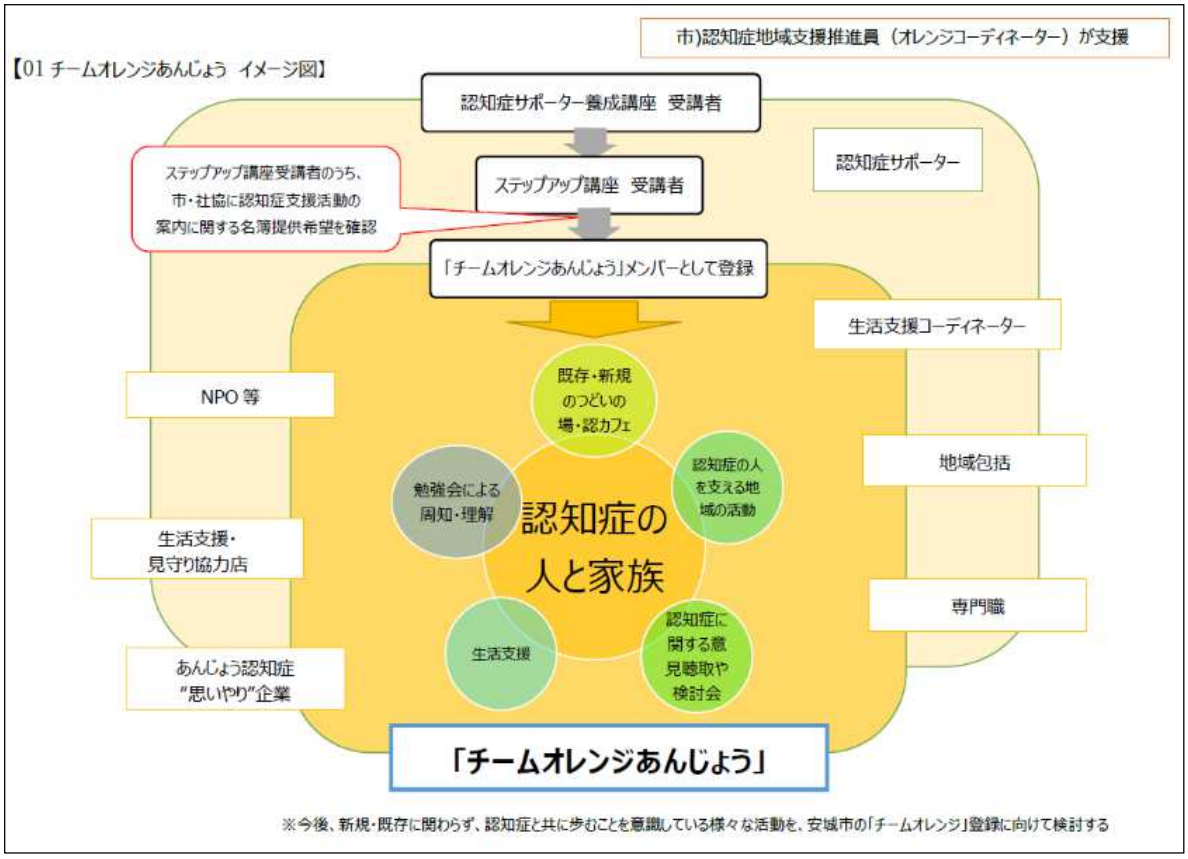
2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年 3 月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	住民主体の認知症ボランティア活動、認知症を含む高齢者の地域支援活動
（4）活動頻度	不定期
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（市直営） ※上記の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	各地区の生活支援コーディネーター
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：７８人 ＜以下、チームを構成する属性＞ チームオレンジコーディネーター、生活支援コーディネーター、登録サポーター（2023 年８月現在 63 名、ステップアップ講座受講生のうち情報提供同意者）
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	市職員

（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※<参考>参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（地域の状況により、第１～３類型を選択予定）

３．活動の立ち上げの経緯と経過
・2017 年度から「認知症サポーターステップアップ講座」を市主催で開始。 ＊ステップアップ講座内で、認知症の本人との交流や支援の体験を企画。 ・行方不明高齢者声掛け捜索模擬訓練への参加 ＊2018 年度に市民を対象に行方不明高齢者捜索模擬訓練を実施。その際、運営の手伝いとして認知症サポーターが参加。 ・認知症カフェ及び若年性認知症イベントへの参加 ＊2017 年度は市内複数の認知症カフェに参加。 ＊2019 年度に若年性認知症に関する市民イベントに運営スタッフとして参加。また、若年性認知症本人と支援者の座談会や認知症カフェへ参加し、支援を実施 ・認知症サポーターステップアップ講座受講者のうち、認知症ボランティアや高齢者の支援に興味のある市民を 2017 年から 2022 年の６年間で 63 名が登録。（これらを以下「登録者」という。） ・日常生活圏域ごとに地域に根差した活動を行う地区社会福祉協議会の担当者が生活支援コーディネーターを兼務していることから、登録者名簿の活用を地域ごとに依頼。 ・2019 年から生活支援コーディネーターとステップアップ講座を協働で企画・開催することで、講座参加者と顔の見える関係を作り、登録者の地域での活動がスムーズに行われるように努めている。 ・2021 年度に生活支援コーディネーターが認知症地域支援推進員研修を受講し、地域での認知症支援に関する活動への理解を深めることで、登録者の活用を促進する取組みを開始。

4．活動内容

【チームオレンジあんじょうのイメージ図】



- 生活支援コーディネーターによる活動参加の案内や調整により、認知症カフェや高齢者サロンなどへの参加につなげる。
- 2022 年には、担い手としての活動や認知症高齢者などの見守り等に関する支援を話し合う会議への参加につながった。

チームオレンジあんじょう登録者を対象とした会議
『チームオレンジあんじょう交流会』の様子▲

・登録者に対して、ステップアップ講座後に日常生活圏域地域ごとの活動に案内することで、より活動に参加しやすいよう誘導する。
・登録者が住所地に近い地域の担当者（生活支援コーディネーター）から参加可能な場所等の紹介を受けることで、地域に根差した活動を行えることを目指す。

5．活動を進めていく上での工夫・配慮

・地域に根差した活動がしやすいように、各福祉センターに配属されている生活支援コーディネーター15 名にチームオレンジあんじょうのメンバーを支える構成員としてご協力いただいている。登録者名簿を各地区の生活支援コーディネーターと共有し、その名簿を講座や地域の会議等の案内にご活用いただいている。
・認知症サポーターステップアップ講座後、地域での活動にスムーズに参加できるよう、また、顔の見える関係が築きやすいよう、各地区の生活支援コーディネーターにも開催協力や見学という形での参加の声掛けを行っている。
・認知症ステップアップ講座内でチームオレンジ及びチームオレンジあんじょうの説明を実施し、登録への働きかけをしている。

6．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・現状のステップアップ講座は、２回連続（10 月、11 月頃）の講座を年に１回開催。市主催及び共催の認知症サポーター養成講座を開催し、開催日をステップアップ講座の開催日に近い日時で設定。サポーター養成講座参加後、時間を空けずステップアップ講座を開催することで、意欲の高い方に参加いただけるよう工夫した。
・対象者については、『認知症の人や家族への支援に興味のある認知症サポーター』と募集案内には明記し、活動意欲の高い方としている。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果・課題＞

・現状はチームオレンジを設置し、活動を開始するための準備段階にあるため、今後の活動を通して効果や課題を分析し、より良い活動にしていきたい。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・認知症サポーターステップアップ講座を毎年開催することでチームオレンジあんじょうの活動参加者が増えることで、地域に認知症の理解者を増やすことができる。
・チームオレンジあんじょう登録者向けのフォローアップ講座等を行うことで、安心して活動を行うことができる。

９．ここがポイント！
・それぞれの地域の状況や特性を理解している生活支援コーディネーターと意欲ある認知症サポーターが、地域の会議で認知症支援について様々な意見交換を始めている。支援活動を検討するところから認知症サポーターのみなさんが参加していることが、チームオレンジあんじょうの特徴になっている。 ・専門職と地域の住民である認知症サポーターが一緒に認知症支援の活動を考えることで、地域に根差した新しい活動が生まれるのではないか。市としても、認知症サポーターのみなさんへの情報提供という形で、活動を一緒に盛り上げていきたい。

＜愛知県から＞

・サポーター（登録者）を各地域の状況や特性を理解している生活支援コーディネーターにつなぐことで、地域に根ざした活動が行われています。

・具体的な活動はこれから行っていくということですので、今後の活動が楽しみです。

チームオレンジ取組事例【西尾市】
【チーム名】（オレンジサポーター）
【タイトル】（劇団「うなぎのねどこ」）

1．自治体情報（2023 年7月 31 日現在）	
（1）人口	170,338 人
（2）高齢者人口	44,048 人
（3）高齢化率	25.9%
（4）面積	161.22 ㎢
（5）日常生活圏域	4 圏域
（6）地域包括支援センター数	7 箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	（西暦）　2022 年　9月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	認知症の方への対応方法を寸劇にて披露
（4）活動頻度	月に 1 回
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※①もしくは②と回答した場合には、 その財源を回答ください。 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	地域包括支援センター、認知症地域支援推進員
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：　１１人 ＜以下、チームを構成する属性を記入＞ ・オレンジサポーター（認知症サポーター）
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員・市職員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※参考参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

認知症サポーター養成講座を受講した認知症サポーターを対象に、フォローアップ研修（基礎編・応用編）を開催し、サポーターとしてどんな活動ができるかグループワークを実施。

フォローアップ研修（応用編）は月に１回開催し、「自分たちで行える地域での活動」について話しあいを重ね、寸劇を通じて認知症理解を深めてもらおうと劇団『うなぎのねどこ』が立ち上がりました。

４．活動内容

認知症サポーター養成講座等で、認知症の日常あるあるを寸劇にて披露。良い接し方・悪い接し方を演じ、受講者に気づきを促している。

今回の寸劇は『財布がない！うちの嫁はどろぼうだ！！』を披露中。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

【メンバーを育成】

・研修カリキュラムを作成し、メンバーの育成を毎年実施。

【メンバーのモチベーションの維持・向上】

・寸劇の内容をメンバー内で検討し、リニューアル。

・育成メンバーでやりたいことを検討し、活動内容を拡大していく。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・認知症フォローアップ研修（基礎編）を年に２回（９月・３月）開催。認知症の方への声掛け方法を学ぶ

・認知症フォローアップ研修（応用編）を年に１０回程度開催。新人オレンジサポーターとして、実践活動につなげる

・認知症合同研修会を年に２回開催。認知症カフェや認知症家族の理解など講師を迎え、勉強会を実施

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・今までは、コーディネーターが活動を進めてきたが、最近はメンバーから改善法などの意見が出るようになり、自主化に向け進み始めた

＜課題＞

・立ち上がったばかりのチームのため、定着化できるようフォローアップが必要。

・活動するための場所・資金不足

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・認知症サポーター養成講座やフォローアップ研修を毎年定期的に開催し、オレンジサポーターの人数を増やしていく。

・活動内容を広げていきたい。

９．ここがポイント！

・毎月実施している寸劇は、サポーターの絆が深まるごとに楽しい掛け合いになってきました。時にはヒートアップし過ぎて、受講者が引いてしまうことも・・・。話し始めたら止まらない活気あるチームです。

＜愛知県から＞

・フォローアップ研修でのグループワークをきっかけとして劇団が立ち上がり、新しいサポーターに向けて認知症の理解を深めてもらうための寸劇が行われています。

・月１回定期的なフォローアップ研修を通して活動が広がっていくことを期待しています。

チームオレンジ取組事例【犬山市】
【チーム名】（チーム西コミ）
【タイトル】（コミュニティみんなで地域を支えよう）

1．自治体情報（2023 年 7 月 31 日現在）	
（1）人口	72,282 人
（2）高齢者人口	21,252 人
（3）高齢化率	29.4%
（4）面積	74.90 ㎢
（5）日常生活圏域	5 圏域
（6）地域包括支援センター数	5 箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年４月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	認知症に関する啓発活動
（4）活動頻度	1 回/1～2 か月
（5）利用料金	200 円/年（コミュニティ会員の会費）
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※①もしくは②と回答した場合の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（コミュニティ会員の会費）
（7）連携する機関等	高齢者あんしん相談センター、市役所
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：15 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 犬山西コミュニティ役員及び会員、 高齢者あんしん相談センター職員、 市高齢者支援課担当者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員・市高齢者支援課職員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

【課題】

・認知症高齢者に対する理解と対応が難しい地域で、共生する方法を模索中であった。
・一部の地域住民からは、あたたかい見守りの目もあり、地域全体に浸透させていきたいと考えていた。

【きっかけ】

・コミュニティの役員から市に対し、認知症高齢者に対する取組が何かできないかと相談を受け、チームオレンジについて説明し、協力してもらえないか相談をしたところ、新たな活動はできないが、もともとコミュニティの活動で行っていた定期的な講座の開催や日常の活動の中での見守りや声かけはできると返事をいただいた。

【関係機関への調整等】

・市から担当圏域の犬山北地区及び犬山南地区の高齢者あんしん相談センターに声をかけ、一緒に取り組むことになった。
・犬山西コミュニティの役員会に出席して役員の方々から意見をもらい、実際の活動がチームオレンジの目的に沿う活動であることを確認・理解してもらった。その中で、実際にできることや今後の地域で取り組んでいきたいことなどの意見交換をしながら、活動内容を検討した。
・会員や会員以外にも認知症サポーター養成講座やステップアップ講座を受講してもらい、ACP についての講座や体操教室などを交えながら、知識の普及等に取り組んだ。

４．活動内容

【講座】

①認知症講座（講師：犬山市認知症初期集中支援チーム）
②認知症サポーター養成講座（講師：高齢者あんしん相談センター・市）
③認知症サポーターステップアップ講座（講師：高齢者あんしん相談センター・市）
④人生会議（ＡＣＰ講座）（講師：尾北医師会地域ケア協力センター）
⑤終活（エンディングノート含む）について（講師：平安閣職員）
⑥介護予防講座・高齢者福祉サービスの説明（講師：高齢者あんしん相談センター・市）
⑦事例紹介、チームオレンジの役割（講師：高齢者あんしん相談センター・市）

【現在の活動】

・１回/月、認知症に関する講座やイベントを開催している。
・認知症の普及啓発を目的として「劇団西コミ」による寸劇を行うため、認知症サポーター養成講座等で認知症の人への接し方を伝えていけるよう練習中である。

講座の様子▼

介護者の体験講演▼

お花見会での二胡演奏▼

ＡＣＰ講座▼

劇団西コミ練習の様子▼

ゲームをしながら▼

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

【コロナ禍の影響】

・高齢者が多いこともあり、感染拡大状況等を考慮し、講座の開催延期等もある中で、講座を実施した。

【活動が軌道に乗るまでの試行錯誤】

・結成に向けて、月１回のコミュニティ役員定例会（夜間）に何度も出席したが、初めの頃は何か新しいことを押し付けられるのではという認識の方もみえた。何度か意見交換する中で、役員から「こんなことならできる」「これならすでにやっている」などと前向きな意見が出てくるようになり、活動開始に至った。

・活動に対する賛同者がいる一方で消極的な方もおり、チーム内でも温度差が生じていた。

【その他】

・チームオレンジの活動は、コミュニティの活動の一環であり、他にも多世代にわたる活動も計画されているため、必要に応じて学校教育課や保健センターなど、関係機関へのつなぎを行った。
・コミュニティの活動が、認知症の人も含めた活動であるという意識が強くなり、自分事として考えた取り組みへの意欲が高まってきた。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・開催頻度：１回／１か月
　　※コロナ禍の影響で開催できないこともあったが、５類移行後は毎月開催。
・対象者：犬山西コミュニティ役員・会員、認知症サポーター養成講座受講者、地域住民

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・認知症当事者からの直接的な相談は受けていない。
・認知機能の低下により、引きこもりがちな方に対して、外出機会のきっかけづくりや地域とのつながりが保てるように活動している。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・当事者や家族からの相談は少なく、認知症であることを隠し、社会参加の機会が少ない地域性があり、把握した時には介護保険サービスに繋ぐ必要があることが多い。
・家族からは在宅生活に支障があることが多く、民生委員、児童委員や地域住民からは独居の方の相談が多い。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・認知症になっても地域の支えがあれば、穏やかに暮らせるという認識を持ってもらえた。
・何か大きなことを行うのではなく、普段の関わりの中での小さなことや自分でできることから始めようという意識が芽生えた。

＜課題＞

・コミュニティ中心の活動であるため、新たな参加者や多世代に渡る賛同者の獲得が難しい。
・引き続き地域住民で話し合えるような働きかけが必要である。
・生活圏域が２つにまたいでいるため、地域特性や考え方の違い、活動の幅を広げるにあたり壁がある。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）
・もともと活動的に取り組んでいたコミュニティの活動の一つとして、認知症に関することも含めた活動を続けてほしい。 ・地域住民が気軽に立ち寄れる場所として認識・利用してほしい。 ・できていることやこれからどんなことができるかを話し合いながら、地域全体の見守り体制がさらに強化し、小さなことから少しずつ積み重ねて活動していく。 ・普段から身近な場面で起こり得ること、自分もなり得ることという意識が高まってきたため、色々な意見を出し合いながら継続した活動になってほしい。

９．ここがポイント！
・おおらかな性格の会長を筆頭に災害対策に力を注いでいる男性メンバーが中心ですが、幅広い視野で考えてくれるとてもチャーミングな女性メンバーが支えている、和気あいあいとしたチームです。

＜愛知県から＞

・コミュニティからの相談がきっかけとなり、丁寧な調整や話し合いを重ね、既存のコミュニティ活動を活用しながら、普及啓発講座を中心とする取組が行われています。

・活動を通して得られた気づきを、今後の講座を通して様々な方に伝えることで、コミュニティならではの多世代にわたる活動へと広がっていくことを期待しています。

チームオレンジ取組事例【犬山市】
【チーム名】（ぐっちはぐいけ）
【タイトル】（共感の場づくり）

1．自治体情報（2023 年７月 31 日現在）	
（1）人口	72,282 人
（2）高齢者人口	21,252 人
（3）高齢化率	29.4%
（4）面積	74.90 ㎢
（5）日常生活圏域	５圏域
（6）地域包括支援センター数	５箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年４月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	介護者のための共感の場づくり及び講座
（4）活動頻度	月１回程度
（5）利用料金	場所代として１回 2,000 円
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※上記の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	生活支援コーディネーター
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：９人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 介護者、高齢者あんしん相談センター職員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

【経緯】

・羽黒・池野地区は，犬山市に５つある地域包括支援センターの中でも高齢者率がトップ、認知症を患っている人は地区だけでも推定 697 人以上いることになる。地域包括支援センターにも色々な相談が入り、職員が抱えているケースにも男性介護者が増えていて「自分たちもどこかに介護の大変さを分かち合える場所がないかな」の声をきっかけにチームオレンジの立ち上げを考えた。

・認知症カフェの参加者の男性介護者にステップアップ講座の参加を募り，2022 年４月から本格的にチームオレンジの立ち上げをした.

【経過】

・チームオレンジコーディネーターを中心にチームオレンジを運営している。チームオレンジの男性介護者は、長年妻を介護している介護者からつい最近介護を始めた新米介護者で構成されていたが、女性介護者も加わることにより、また違った目線で共感の場にも幅が広がるのではないかと考え少しずつ進み始めている。今までのチームオレンジの良さを大切にしながら「共感の場づくり」の方向性で活動を継続していくことを考えている。

４．活動内容

・主な活動内容は介護者のための共感の場づくりや講座を中心に行っている。

・活動をする中で印象的な出来事について紹介する。

＊ある日の活動のこと、男性介護者たちの中に女性介護者が参加された。

＊女性介護者の方は、「『認知症の母親がいなかったらいいのに…。』と思う自分がいて、このことを他の人にはなかなか言えない」とのことだった。

＊その場にいた他の参加者は、皆、声を揃えて「ある。ある。そんなこと」というような声があった。その場が和み、女性相談者から涙が出た。なんだかホッとした空気が流れた。

普段の活動の様子▲

５．活動を進めていく上での工夫・配慮
・コロナ禍での活動は，やはり感染の心配をされるチーム参加者の声やコロナ禍の現状を踏まえ自粛とした。チーム参加者の中には、チームオレンジの活動以外で生活支援コーディネーターなどが関わる機会があり、その時に得た情報をもらうことにより現状把握していた。 ・本格始動をした際には感染予防はしっかり行う配慮をした。生活支援コーディネーターは、再開をしたサロンに行き引きこもっていた高齢者の把握をしながら活動に際し、互いに情報共有をするなど工夫をしていた。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮
＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞ ・生活支援コーディネーターとの連携により情報共有をしていた。また、職員が抱える認知症の本人や家族の困りごとを情報共有し、状況によっては、チームオレンジの活動を情報提供した。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題
＜効果＞ ・積極的に今後目標を話し合うことができるようになった。 ＜課題＞ ・共感の場づくりを土台にチームメンバーが主体的に活動をするまでには至らない。 ・自分たちには、荷が重いといった印象がある。次の担い手づくりの方法も考えていく必要がある。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）
・チラシなど啓発活動に行くことで認知症本人やその家族をスーパーの従業員の方が、細かく気を付けていただけていることを知った。 ・今後チームオレンジを活動するにあたり、スーパーの従業員や民生委員等に向け講座を開催し、チームメンバーを広げていくことで活動の場が広がっていくのではないかと期待をしている。 ・立ち上げ時は男性介護者が中心であったが、今後は女性介護者の参入も呼びかけ、様々な視点から意見を出し合って活動していきたい。

９．ここがポイント！
・ゆったりとした空気間の中で困りごとを何でも話すことができる癒しのチームです。

＜愛知県から＞

・介護者からの声をきっかけにチームオレンジを立ち上がり、介護者の方のための「共感の場づくり」として主に介護での困りごとを話し合う活動が行われています。

・この事例を通して、共感の重要性を改めて認識することができました。

チームオレンジ取組事例【常滑市】
【チーム名】（チームオレンジとことこ）
【タイトル】（笑顔で活動・地域へ広げる支援の輪！）

1．自治体情報（2023 年７月３１日現在）	
（1）人口	58,622 人
（2）高齢者人口	15,178 人
（3）高齢化率	25.89%
（4）面積	55.90 ㎢
（5）日常生活圏域	３圏域
（6）地域包括支援センター数	３箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年４月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	居場所・サロン・個別支援・啓発活動・ 重層的支援活動
（4）活動頻度	居場所・サロン/週１回、その他は随時対応
（5）利用料金	おいでや：１回 100 円（お茶・お菓子代） その他は無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※①もしくは②と回答した場合の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	地域包括支援センター、行政、生活支援コーディネーター、認知症初期集中支援チーム、障がい者相談支援センター、社会福祉協議会、若年性認知症総合支援センターなどの関係機関
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：登録者約 40 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 認知症地域支援推進員、第１層・２層生活支援コーデイネーター、社協地域ボランティア(専門チーム)、NPO 法人あかり傾聴ボランティア
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	オレンジチューター（認知症地域支援推進員）

（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※参考参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（移動型：啓発活動）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

【経緯】

〇2017 年

・11 月に「地域ボランティアセンター」が立ち上がる。

・常滑市社会福祉協議会に委託配置されている第 1 層生活支援コーデイネーターによるイベントなどでボランティア活動の意志を確認し、300 名を超える市民の声をいただき設立。

〇2018 年

・地域ボランティアセンター登録者：208 名

・介護保険で対応できない内容を中心に(見守り、ゴミ捨て、自宅清掃、散歩、買い物など)依頼を受けて活動開始。

〇2019 年

・認知症がある方の支援増加から認知症に理解ある有資格者など（民生委員、高齢者サポーター、介護職員、保育士、看護師、ケアマネジャー等）にて「認知症理解啓発チーム」の専門チーム（以下、専門チームという。）を組み、早期対応に繋げる。

〇2021 年

・９月に「若年性認知症」、「元気な認知症」の方への支援が必要になり、「チームオレンジ」設立を前提に暫定的に専門チームで動き出した。

・10 月に認知症ステップアップ講座開催。受講者で、チームオレンジ活動の趣旨に賛同し、協力いただける方をチームオレンジとしてメンバー登録。

・試験的に既存のまちかどサロンを活用し移動型をスタート。

〇2022 年

・４月から「チームオレンジとことこ」の名称にて活動開始（メンバー約 40 名）。

＊居場所１か所

＊誰もが参加できるカフェ２か所(移動式：第２層生活支援コーデイネーター常駐)

＊個別支援（利用２名）

※支援例「若年性認知症」：とこなめ市民交流センター内の消毒清掃活動支援

「元気な認知症」：高齢者のゴミ出しボランティアの声かけ・草とり作業付き添い支援

＊啓発活動（認知症サポーター養成講座、サロン、老人会、イベントへの協力等）

・９月から重層的支援を目指し、認知症当事者２名と障がいの方１名の計３名の幅広い支援の活動開始（花壇作りなど）。

・活動メンバーは、各地域ごとで代表者を決め、都度、招集している。

・活動は、メンバー主導。

【現在】

〇2023年

・個別支援（現在利用５名）

※支援例「若年性認知症」：とこなめ市民交流センター内の消毒清掃活動支援

「元気な認知症」：草とり作業付き添い支援

「アルツハイマー型認知症（３名）」：居場所などの社会活動の参加支援

・愛知県ピアサポート活動支援事業を受託し、ピアサポート活動の支援を実施。
本人の強みを活かせるよう、必要時にはチーム員にて支援する。

① 本人ミーティングの開催（年３～４回）

② 「おれんじみーてぃんぐ」にて本人同士の交流ブースの設置

③ 認知症ステップアップ研修にて講師依頼

【関係機関への働きかけ】

〇第１層生活支援コーデイーターや行政との連携

・第１層生活支援コーデイネーター

＊「地域ボランティア」立ち上げ当時から相談や連携を図り、研修やボランティア会議など共同で実施。「チームオレンジ」設立に向けて連携をより深めた。

・行政

＊予算や、内容などの調整を担当。関係機関の会議を経て決定。

〇NPO 法人あかりとの連携

・NPO 法人あかり・傾聴ボランティアグループへ主旨説明し、理解を得た。活動開始に向けての話し合いや説明会を実施。

〇研修

・フォローアップ研修：傾聴などの研修（２回～/年）

・ステップアップ研修：認知症に関する講義や認知症介護者家族や認知症当事者や GH 入所者などから話を聞いて交流を持たせる内容（１回/年）

〇愛称

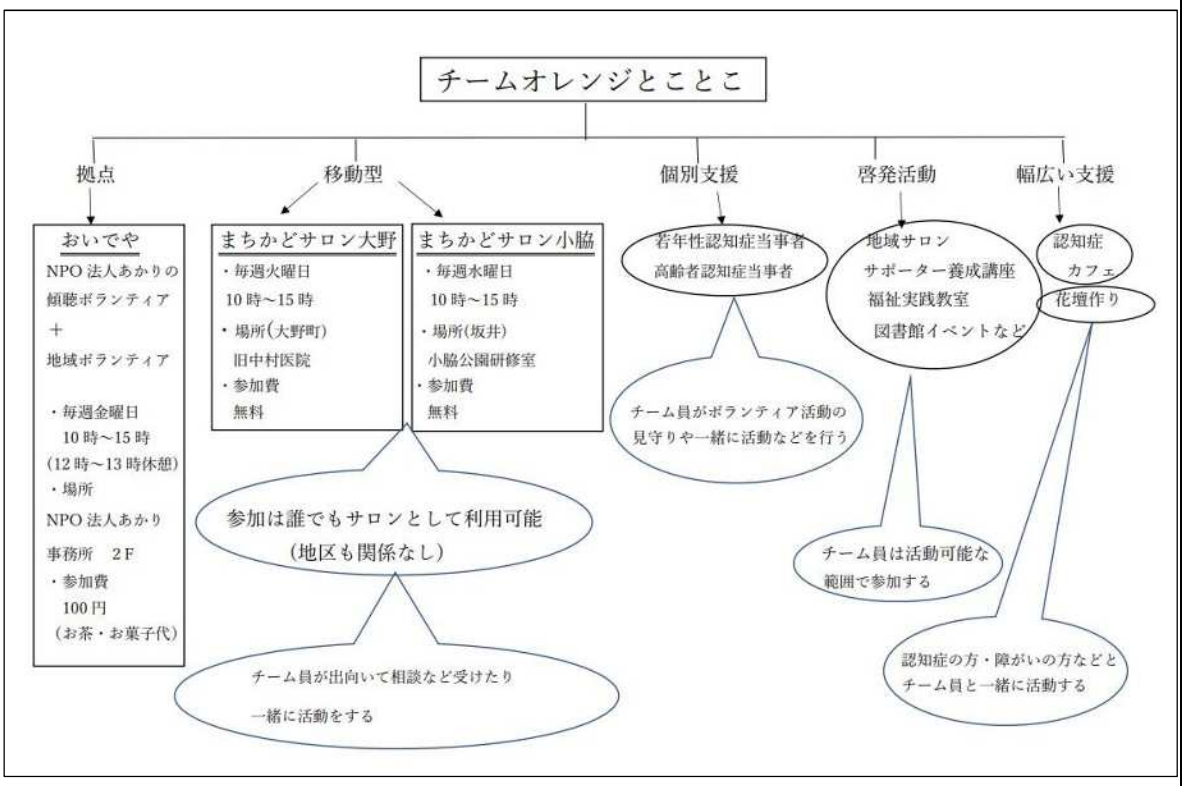
・地域ボランティア認知症啓発チームと NPO 法人あかり傾聴ボランティアとの合同会議で顔合わせをし、ボランティア同士でネーミングを検討し、「チームオレンジとことこ」に決定。

【チームオレンジコーデイネーターの役割】

・第１層生活支援コーデイネーター・行政・NPO 法人あかり傾聴ボランティア・地域ボランティア・サロン・ケアマネジャー・障がい担当・公共機関・民生委員・学校など、関係機関と繋がり、認知症理解啓発活動を若い世代～高齢者、全ての住民へ広げ、活動者や認知症当事者との懸け橋になり、安心して生活できる地域づくりに努める。

4．活動内容

【「チームオレンジとことこ」活動内容】



拠点：おいでや▶

移動型：まちかどサロン大野▼

移動型：まちかどサロン小脇▼

啓発活動：地域サロン、小中学校等にて認知症サポーター養成講座▼

個別支援▼

幅広い支援：花壇作り▼

幅広い支援：認知症カフェ▼

チームオレンジとことこ活動チラシ▼

認知症サポーター活動促進・地域づくり推進事業

チームオレンジとことこ

～認知症支援チーム～

チームオレンジとことことは？

・認知症の人とその家族の日々の生活などの相談に応じ、認知症があっても地域で安心して暮らし続け、また地域を支える一員として社会と関わり活躍していける地域づくりのお手伝いをするチームです。

どんなときに相談すればいい？

・最近、もの忘れが多いと感じるようになった。
・家族や自身が認知症ではないか？と気になり、不安である。
・医療、介護サービス、地域活動の場など、社会資源の情報を知りたい。
・認知症の人との関わり方で困っていることがある。

どんな支援が受けられるの？

・思いを受け止め（傾聴）、また必要に応じ専門機関へつなげていきます。
・生活の中での困りごとを改善するための工夫について一緒に考えます。
・個々のニーズに合わせた社会活動のお手伝いをします。

チームオレンジとことこのメンバーって？

・傾聴スタッフと認知症サポーターで構成されています。

※開催場所、開催日時は裏面に記載してあります※

どこに行けばいいの？

◎市内の居場所として・・・

おいでや　「チームオレンジとことこ　おいでや」

開催日　：　毎週金曜日
時　間　：　10:00～15:00　（12:00～13:00 昼休憩）
場　所　：　NPO 法人あかり事務所（常滑市本町）
参加費　：　100 円　（お茶・お菓子代）

まちかどサロン大野　「チームオレンジとことこ　まちかどサロン大野」

開催日　：　毎週火曜日
時　間　：　10:00～15:00
場　所　：　旧中村医院（常滑市大野町）
参加費　：　無料
その他　：　誰でもサロンとして利用可能

まちかどサロン小脇　「チームオレンジとことこ　まちかどサロン小脇」

開催日　：　毎週水曜日
時　間　：　10:00～15:00
場　所　：　小脇公園研修室（常滑市坂井）
参加費　：　無料
その他　：　誰でもサロンとして利用可能

【お問合せ先】
北部高齢者支援センター（基幹）
43－0662

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

【生活支援コーデイネーターとの連携】

・第１層生活支援コーデイネーターとは研修会の開催や、個別支援・啓発活動などについて随時、相談・連携しながら進めている。

【認知症サポーターへの働きかけ】

・認知症サポーターの特性を活かせるよう、第１層生活支援コーデイネーターと相談しながら協力を依頼している。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・年１回

・地域ボランティアセンター内にある認知症理解啓発チーム員で未受講者に声かけ。

・認知症サポーター養成講座開催時に、「チームオレンジ」についての主旨説明や活動紹介行い、ステップアップ研修の受講者を募る。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・本人の意思・できることを尊重し、寄り添う姿勢を持つ。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・「チームオレンジとことこ」活動開始時には、チームオレンジメンバーだけでなく、地域包括支援センターの職員や生活支援コーデイネーター等も参加し、認知症に関する困りごとだけでなく、生活全般の困りごとにも対応し、問題解決に向け関係機関と情報共有し、必要な支援に繋げていく。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・認知症があっても、認知症当事者のできる活動を重視し、支援されるだけでなく、支援する側にて社会の一員として活動している。最初は一人では難しい活動も、支援者が声かけや少しの手助けをしていたが、今では一人できちんとこなすことができている。また、役割を持って活動することにより、本人の意欲向上にも繋がり、本人からは「楽しい」との声も聴かれるようになった。

＜課題＞

・活動場所までの移動手段

→　2023 年からはタクシー会社を利用した社会福祉協議会からの支援があり、活動場所までの移動手段についての課題は解決した。

・病状の進行による活動の見極め

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・幅広い支援を開始し、今後は、障がい相談センター等の障がいに関する関係機関も巻き込んで、地域で誰もが参加できる居場所づくりを広げていきたい。
・本人の強みを活かせるような活動を展開していきたい。
・「支えられる側」から「支える側」となり、本人の役割づくりをつくり、社会との繋がりを持ち続けられるようにすることで、地域の理解も進むことを期待する。
・移動手段でタクシー会社を活用することで、企業への啓発だけでなく、実際に当事者と接することにより対応力の向上や理解を深めることを期待する。

９．ここがポイント！

本市の「チームオレンジとことこ」は、

（１）既存拠点型では、傾聴ボランティアが常駐し、認知症当事者やご家族のお話しを傾聴し、個々の希望に沿った趣味やニーズに合わせた活動実施。
（２）まちかどサロン(２か所)では、第２層生活支援コーデイネーターが常駐し、チーム員が参加。生活全般の心配ごと～認知症相談など幅広く受け付け、必要時には地域包括支援センターへ繋げることで迅速な対応ができている。また、誰でも参加できる居場所にて他交流も可能。
（３）個別対応では、認知症当事者の強みを活かして、できることをチーム員とともに実施。本人も社会での役割を担っている（清掃活動やゴミ捨て・草かり支援)。
（４）認知症啓発活動とサポーター養成講座(小中学校など)や地域サロン、捜索模擬訓練などに参加。市内全域で行っている。
（５）障がいの方や若年性認知症の方も活動に参加できるよう、「認知症当事者も同じ仲間」意識で一緒に活動し、認知症当事者も安心して参加することができている。
（６）チーム員の得意活動を活かせるように、活動別(啓発活動や、個別支援)に参加者を募り、支援者も参加者も楽しい時間を持つことができ、お互い活性化している。

＜愛知県から＞

・ボランティアセンターの活動をベースに、既存のNPO法人やサロンなどの既存の地域資源や生活支援コーディネーターとも連携しながら、幅広い活動が展開されています。
・若年性認知症の方や障がいのある方も含め、ご本人が支援する側としての役割を持ち、活動を行われています。

チームオレンジ取組事例【江南市】
【チーム名】（　チームオレンジなんぶ　）
【タイトル】（チームオレンジにおける地域活動の推進）

1．自治体情報（2023 年7月 31 日現在）	
（1）人口	98,711 人
（2）高齢者人口	27,663 人
（3）高齢化率	28.0%
（4）面積	30.2 ㎢
（5）日常生活圏域	3 圏域
（6）地域包括支援センター数	3か所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2021 年 2 月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	・認知症カフェの運営（準備設営、受付・講師や演者として出演） ・認知症本人・家族のニーズに合わせ、チームメンバーの「できること」をマッチング （認知症カフェ内での案内や対応、認知症本人への傾聴ボランティア、（今後）社協の移送サービス車両活用事業を利用した移送支援）
（4）活動頻度	1 回/週～月
（5）利用料金	無料～100 円
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※①もしくは②と回答した場合には、 その財源を回答ください。 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	所属法人　物忘れ外来、社会福祉協議会

（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：　19　人 ＜以下、チームを構成する属性を記入＞ 認知症地域支援推進員・地域包括支援センター職員・認知症介護経験者（家族）・サロン代表者、サロン参加者・デイサービス職員・看護師・作業療法士、ヨガ講師
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□）※参考参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

- 2018 年８月～地域包括支援センター主催で認知症カフェ「にじいろカフェ」・2019 年 10 月に地域住民からの声で生まれた「五条川ジョイカフェ」を開催。
- 五条川ジョイカフェの準備会にて認知症サポーター養成講座を開催。その際認知症カフェボランティア（カフェ協力し隊！）を募集。同様ににじいろカフェでもボランティアを募集した。
  ※認知症カフェボランティアは会場設営・準備・おれんじ通信作成等を担当
- 認知症カフェ事務局を認知症地域支援推進員はじめ地域包括支援センター職員にて担当、カフェ協力し隊！の手引きや名札を作成し活動しやすい体制を整備。
- 2021 年２月にステップアップ講座を初開催、認知症への理解を深めながら活動についてボランティア間で協議する場を設置し「できることをできるだけ」をモットーにチームオレンジなんぶを結成するに至る。
- チームオレンジなんぶの構成メンバーは認知症カフェに通っていた当事者家族、圏域介護施設の職員（認知症サポーター養成講座の中でカフェを知りボランティア希望）、五条川ジョイカフェ立ち上げに関わった地域住民等。
- ステップアップ講座を開催（年一回）する中、認知症について学びながら本人について「本人座談会（NHK）」「希望の道（厚生労働省）」等の動画を視聴しながら活動について意見交換。ボランティア自身の背景に合わせた支援への思いを共有・協議できる場となる。
- 2022 年５月から、所属法人物忘れ外来の時間帯に合わせ、地域包括支援センター内にて早期相談・早期支援を目的に「認知症本人・家族が気軽に相談できる場」として「おれんじルーム」を開催（週一回）。

・おれんじルームに認知症本人の継続参加が行われ出したタイミングで、ステップアップ講座にて「人の話を聞くことが好き」と話をしていたチームメンバーと認知症本人をマッチング。またマッチング内容や結果を他のメンバーとも共有。「自分のできること」を考えたメンバーから、自分のできること・やりたいことに関する声が事務局側へ上がるようになった。
・生活関連企業からの認知症サポーター養成講座依頼の増加を受け、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」として包括との連携や継続的な講座（ステップアップ講座含む）開催を提案。圏域に移転した市立図書館とも「全世代型認知症啓蒙（アルツハイマーデーイベント）」について協議し、認知症から「地域共生社会」を考えていただくきっかけづくりを行った。

4．活動内容

・認知症施策取り組み紹介
・企業への連携提案

5．活動を進めていく上での工夫・配慮

・認知症カフェではコロナ禍にて活動場所の変更（法人内会議室・介護施設地域交流スペースから地域共用施設へ）・感染対策として参加者を登録制としリスト化・中止が続いたため定期通信を活用したつながり続ける仕掛けづくり。
・チームオレンジメンバーに関しては、認知症カフェ終了後にぷち反省会を開催、カフェの感想以外にもざっくばらんに意見交換する場として活用。
・生活関連企業との連携について企業側の温度感・ニーズを丁寧に確認しながら、顔の見える関係作りから具体的な連携内容の提案を行った。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

開催頻度：年一回

対象者：カフェ協力し隊！（チームオレンジなんぶメンバー）

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

認知症地域支援推進員にて認知症ケースを重点的に対応、本人の意向に合わせ認知症カフェやおれんじルームを提案。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

個別ケースからだけでなく、おれんじルームに参加することでより関係性が深まった本人・家族からの声も聞く機会あり。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・ボランティアさん自身の認知症への理解が深まり、「共生」についての意識が育ちつつある。

・ボランティアさん自身も地域の仲間であり、カフェやルームに参加していない地域住民を口コミで呼び込む等互助の広がりがある。

＜課題＞

・子ども世代～現役世代のチームメンバーはあまりなく（子どもは０）、認知症について・認知症の取組について知る機会があまりない

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・カフェ開催当初から参加していた地域住民が要介護状態となり参加困難になるケースが増えてきており、移動支援について協議・検討中。

・生活関連企業との連携を推進、チームオレンジなんぶの企業メンバー化。

・「認知症を身近に感じてみよう」をテーマに一般向け認知症サポーター養成講座を継続開催し、全世代に向けて「認知症」について発信。自分ごととして考える機会の創出。

９．ここがポイント！

・カフェ協力し隊！時代から「出来ることを出来る範囲で」をモットーに活動。メンバーの「活動の場」と「活動内容」を具体的に示しハードルを下げ参加しやすい体制を構築。メンバーが新規メンバーを誘う動きや、ステップアップ講座・ぷち反省会の中で「こうしたい」「これはどうか」等の主体的な意見交換も活発であり、メンバー自身も参加することでやりがいも見いだせている。

・認知症カフェでは人数や地域の関係性等から認知症本人や家族の継続利用のできにくさが課題だったが、個別で対応する「おれんじルーム」を開設したことで認知症本人や家族が継続的に参加。チームオレンジの活動の場としてもマッチングしやすい環境となった。

・民間企業からの認知症サポーター養成講座依頼をきっかけに企業サポーターを提案、協働することで「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり」の考え方・活動を広げ、先々はチームオレンジメンバーの一員となる土壌を作った。

＜愛知県から＞

・おれんじルームでの早期の丁寧な関わりが、本人の想いに沿ったチームオレンジ活動につながっています。

・今後、幅広い世代への発信や企業との連携が進み、地域全体に広がっていくことを期待しています。

チームオレンジ取組事例【小牧市】
【チーム名】（チームオレンジきたさと）
【タイトル】（笑顔でつなぐみんなのカフェ）

1．自治体情報（2023 年８月１日現在）	
（1）人口	150,101 人
（2）高齢者人口	38,073 人
（3）高齢化率	25.36%
（4）面積	62.81 ㎢
（5）日常生活圏域	６圏域
（6）地域包括支援センター数	５箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年４月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	カフェの運営、認知症サポーター養成講座
（4）活動頻度	月１日（オレンジカフェきたさと）他、養成講座
（5）利用料金	100 円
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※①もしくは②と回答した場合の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	薬局（構成メンバー含む） 小牧市認知症初期集中支援チーム、小牧市認知症初期集中支援チーム検討委員会、認知症サポート医
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：18 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 市町村職員（地域包括ケア推進課）、認知症地域支援推進員、地域包括支援センター職員、小牧市社会福祉協議会（地域支え合い推進員）、認知症カフェ運営者、薬局（３か所）、郵便局、北里小学校区地域協議会、認知症初期集中支援チーム
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	― （認知症地域支援推進員が中心となって活動）

（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

- 認知症の方が、活躍できる場、人として尊重される場、輝いていた時期を意図的に引き出せるような場、そして認知症の方を介護する家族と支え手となる地域の人々がともに集える場所として、2019 年７月に認知症カフェ「オレンジカフェきたさと」を開設した。
- そのような状況の中、認知症サポーターステップアップ講座を受講したオレンジカフェきたさとのメンバーと認知症地域支援推進員、北里地域包括支援センターの職員が勉強会を重ねる中で、チームオレンジの活動について学び、そのことがきっかけとなり「チームオレンジとして、地域の支え手を拡げていきたい。認知症の方が地域で自分らしく暮らせる働きかけができないだろうか。」という声が上がり、2022 年４月に「チームオレンジきたさと」が立ち上がった。
- 認知症初期集中支援チーム員への個別相談や運営支援など、市からの協力を受ける一方、既に認知症カフェとしての活動実績もあったことから、地域からも協力の申し出が次々に上がった。

４．活動内容

①認知症カフェ運営・勉強会

- 毎月、第４土曜日に開催している認知症カフェは、常連の顔ぶれはもちろんのこと、他地域の方も受け入れている。
- 認知症カフェのしつらえとしては、所々に季節の花、手作りのコースター、テーブルクロスなど温かみのある演出をし、スタッフは、お揃いのお手製エプロンを着用している。
- 笑いが絶えないプログラムとして、みんなの認知症予防ゲームや薬剤師によるミニ講話、季節を感じさせるテーマなど、毎回チームメンバーが工夫をしながら取り入れており、認知症カフェ開催後には、認知症地域支援推進員や専門職を招いて認知症の勉強会を開催している。

オレンジカフェきたさとでの活動の様子▲

スタッフのお孫さんも
カフェのお手伝いをしに来場▶

オレンジカフェきたさとでのクリスマス会の様子▲

②認知症サポーター養成講座のサポート

- 2022 年 9 月 16 日、チームオレンジきたさとのメンバーと北里地域包括支援センターとで、北里中学校での「認知症サポーター養成講座」を実施し、計 112 名の生徒に受講していただいた。
- 2022 年度から「地域共生」が中学校の学習カリキュラムのテーマに加わったことから、学習内容との整合性を図る為、事前の打ち合わせも何度か行った。
- 生徒に「地域」を身近に感じてもらえるように、チームオレンジきたさとのメンバーによる寸劇を交え、中学生に分かりやすく説明した。
- また、グループワークの時間も設けるなど、生徒が考え、自分達の意見をまとめるという内容が、大変好評であったことから、今後も「認知症サポーター養成講座」を継続していくこととなった。

中学校での認知症サポーター養成講座の様子▲

③当事者・介護者の交流の懸け橋

・認知症カフェとは別日（毎月第４木曜日）に開催している「認知症家族介護者交流会」へ、認知症の介護経験のあるメンバーが積極的に参加し、認知症当事者とその家族にとってのピアカウンセリングのような働きかけや専門職への繋ぎの役割を担っている。

5．活動を進めていく上での工夫・配慮

【コロナ禍における工夫】

・2020 年度は、感染拡大の懸念から認知症カフェ開催は見送る形を取ったが、認知症家族介護者交流会は、常連参加者とチームオレンジきたさとのメンバーがラインで繋がり、サポート体制を組んだ。また、オンラインでの交流会を企画するなど、コロナ禍でも認知症の介護者が孤立しないことを目指した。

・また、その間、チームオレンジきたさとのメンバーと北里地域包括支援センターで、感染予防の勉強会を開催し、活動再開に向けての準備を整えた。

【支え合い地域推進員との連携】

・認知症カフェ立ち上げの時から関わりを持っており、認知症カフェ運営のサポートやチームオレンジきたさとのメンバーとしても積極的に活動をいただいている。

【認知症サポーターへの働きかけ】

・地域の認知症サポーターを増やしていくと同時に、福祉サービス事業所によるサポーターの参加も目標としている。

・小規模多機能施設、地域密着型認知症通所介護、グループホームなどの職能サポーターの参加も働きかけているが、コロナ禍のため、まだ実現には至っていないが、各事業所からの賛同はいただいている。

6．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・ステップアップ講座は、毎年開催とし、ステップアップ講座修了者のフォローアップ講座の開催についても検討中。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・認知症があってもなくても誰でも楽しめ、元気を分け合え、笑顔で集える活動をコンセプトとして、一緒に行うこと、寄り添うこと、さり気ない気配り、心配りをメンバーが率先して実践している。

・認知症カフェ終了後の反省会などで、互いに良かった点や課題を話し合うことで、対応力を高めている。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・どのメンバーもまず、傾聴することにより、寄り添うチームオレンジきたさとを合言葉としており、必ず、活動拠点には専門職の参加を必須としているので、自然な流れの中で、相談としてつなぐことを実践しています。
・専門職が受けた相談については、本人・家族の同意のもと、必要に応じ、更に専門機関につないで、課題解決を早期に実施できる仕組みを作っている。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・認知症カフェのプログラムの中に「みんなの認知症予防ゲーム」などの予防プログラムを取り入れたことにより、チームオレンジきたさとのメンバーの関心が高まり、「認知症予防ゲームリーダー養成講座」を受講するなど、活動からの波及効果が出てきた。
・また、チームオレンジきたさとのメンバーによる「認知症サポーター養成講座」と前後して、小学校区の地域協議会福祉部会からも、認知症サポーター養成講座のサポーターとしての活動が生まれるなど、地域の方の活動参加の拡がりを見せている。

＜課題＞

・認知症カフェの開催頻度が「月１回」にとどまっているため、まずは、開催頻度を増やすことが当面の課題。
・今後は、常設の活動拠点を目指したいが、場所という資源と人的資源の不足という課題がある。
・コロナ禍の影響から福祉サービス事業所の参加が激減している。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・チームオレンジきたさとの活動拠点を広げていく仕掛けとして、地域密着型サービス事業所の交流スペースを活用して、認知症カフェや相談会、本人・家族の交流会を増やしていきたいと考えている。
・場所の提供と同時に、協力いただける専門職、地域のサポーターを増やしていくことをチームオレンジきたさとのメンバーとともに、今後も地道に進めていきたいと考えている。

9．ここがポイント！

・オレンジカフェきたさと、チームオレンジきたさと、地域協議会などの活動が繋がって、地域活動の輪が拡がっています。
・北里地域包括支援センターや福祉サービス事業所の専門職が参加することで、メンバーのスキルアップを図るとともに、迅速に相談支援につなぐことができています。

＜愛知県から＞

- 認知症カフェの活動から開始し、サポーターや認知症地域支援推進員、地域包括支援センターが連携して認知症サポーター養成講座のサポートや認知症家族介護者交流会などの活動が行われています。
- 今後、各事業所への活動の広がりにも期待しています。

チームオレンジ取組事例【新城市】
【チーム名】（ちーむおれんぢ新城）
【タイトル】（認知症の方に優しいまちづくりのために活動しています）

1．自治体情報（2023 年7月 31 日現在）	
（1）人口	43,380 人
（2）高齢者人口	16,178 人
（3）高齢化率	37.4%
（4）面積	499.23 ㎢
（5）日常生活圏域	6圏域
（6）地域包括支援センター数	1 箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年 12 月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	定例会、勉強会、認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座の参加、認知症カフェの企画運営のサポート、RUN伴＋他認知症に関連する事業への参加等
（4）活動頻度	月１回、他活動依頼に応じて活動
（5）利用料金	なし
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（必要に応じて個人）
（7）連携する機関等	市内グループホーム、認知症カフェ
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：10 人 ＜以下、チームを構成する属性を記入＞ 一般の方、健康づくりリーダー兼ボランティア団体員、認知症カフェ運営者、グループホーム職員 ＊他オブザーバーとしてグループホーム管理者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	設置なし
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

認知症本人と家族の方がどんな支援を求めているかアンケート調査を実施しました。その結果、本人からは草刈・野菜づくり・友人と会話・手芸・買い物がしたい、家族からは話し相手や買い物、外に連れ出してほしい等の希望がありました。

そこで、認知症サポーターが手助けできるよう、チームオレンジの立ち上げに向けて、２０２２年度に初めてのステップアップ講座を実施し、活動への参加を募ったところ、１０名の方が参加していただくことになりました。

チームオレンジコーディネーターの設置は、後々必要になっていくと考えますが、現在は地域包括支援センターの認知症地域支援推進員が、主に活動の場の創出や調整・まとめ役を担い、市は主に定例会の運営を行う等、役割分担かつ協力して、運営の手助けや活動の場を広げられるように支援をしています。

活動内容は、地域包括支援センターの認知症地域支援推進員や、イベントの運営委員からの提案によるものが多いです。定例会で話し合いをしながら、参加や方針を決めています。

立ち上げ当初は、グループホームのお誕生日会に参加させていただき、認知症の方の対応を学ぶことから始めました。不安や戸惑いが多く感じられる様子でしたが、認知症サポーター養成講座の対応を学ぶ劇に役者として参加、その後もイベントの参加や市内１１か所ある認知症カフェの参加を呼びかけ、現在では認知症カフェのボランティアの一員となり、企画運営の話合いに参加し、運営に参加する等活躍の場を広げています。

４．活動内容

１．定例会の実施

月１回集まり、情報交換・勉強会、活動内容の検討等を行っています。

認知症カフェで行う折り紙の練習を行ったりもします。

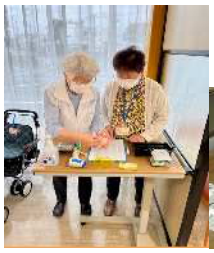
２．認知症サポーター養成講座の参加

劇で認知症対応を学ぶ講座や〇×クイズを担当しました。

準備片付けなども行います。

３．ボランティア活動

認知症カフェのスタッフで参加やイベントで認知症カフェの PR を行いました。



５．活動を進めていく上での工夫・配慮

（１）活動が負担にならないために

定例会を「毎月第２金曜日１３時３０分」からと設定し、参加できる方は来所する、欠席の連絡は不要という体制をとっています。また、連絡が取りやすいように LINE のグループ機能を使っています。LINE が苦手な方もいますが、お互いに教え合う等、使えるように練習を兼ねて利用していただいています。

（２）関わり方の不安に対応できるように

グループホーム管理者兼キャラバンメイトの方にオブザーバーとして参加していただいています。グループホームにボランティアとして参加し、勉強をさせていただきました。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

年に１回開催し希望される方がチームオレンジに参加できるようにしています。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

本人が定例会に参加できるように、本人へ働きかける予定です。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

認知症の方本人と家族を対象にアンケートを実施しました。その他日々の活動の中で地域包括支援センターの認知症地域支援推進員が把握していることを、定例会等で情報提供をしています。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

スタッフが少ない認知症カフェのボランティアや企画を一緒に考え、運営の手助けとなっています。

＜課題＞

地域包括支援センター・市がまだ主体であるので、参加者が自発的に活動できるようにしていきたいと考えています。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

認知症の方本人の希望に沿った支援ができるように今後取り組んでいきたいと考えています。

９．ここがポイント！

チーム員は様々な経歴や個性があふれる方達です。それぞれの得意を生かしてできることから、少しずつ前進しています。

＜愛知県から＞

- ご本人やご家族にアンケート調査を実施し、それぞれの想いを手助けしたい認知症サポーターが集まり、チームオレンジが立ち上がりました。
- 今後も月１回の定例会をベースにグループホームとも連携しながら、本人の希望に沿った支援が展開されていくことを期待しています。

チームオレンジ取組事例【東海市】
【タイトル】（サポーターも楽しんで活動、活躍を！）

1．自治体情報（2023 年7月 31 日現在）	
（1）人口	113,513 人
（2）高齢者人口	26,626 人
（3）高齢化率	23.5%
（4）面積	43.43 ㎢
（5）日常生活圏域	5圏域
（6）地域包括支援センター数	1 箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2021 年4月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	定例会参加、認知症事業への支援、つどいの場運営、啓発イベント参加、小学生への認知症サポーター養成講座で紙芝居
（4）活動頻度	月1～2回　※認知症事業の支援　随時
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※上記財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	市役所、社会福祉協議会、 地域包括支援センター、商工会議所
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：【地域サポーター】15 人 【企業サポーター】　9 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 【地域】地域住民、認知症地域支援推進員 【企業】介護保険事業所管理者、介護保険事業所職員、個人事業主（電気、清掃、建築）、歯科医師、オレンジフェスティバル実行委員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員

（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） 【企業サポーター】 ④その他（①に近いがいつでも集まれる拠点ではない） 【地域サポーター】

３．活動の立ち上げの経緯と経過

【地域】

- チームオレンジの立ち上げに協力してくれる地域サポーターを 2020 年度末に募集した。毎年２月に実施するフォローアップ講座受講者へ案内、３月社会福祉協議会広報誌に募集記事を掲載した。
- 2021 年４月　第１回交流会参加者　10 人　→　現在登録サポーター　１５人
  ※第１回のみ交流会とし、以後定例会として月１回実施。
- どんなことができるか定例会で検討を重ね、2022 年１月からつどいの場「みかんの花」を実施（月１回２時間）。実施にあたりネーミングはサポーターで決定した。
- 小学生対象の認知症サポーター養成講座で紙芝居の協力、知多メディアスネットワークの東海市行政番組内で認知症啓発の寸劇、イベントの参加等、認知症事業への支援協力をしてくれている。

【企業】

- 地域サポーターの募集と同時期に、オレンジフェスティバル（東海商工会議所青年部主催で開催された認知症啓発のイベント）の実行委員をしていた方にチームオレンジの立ち上げについて相談。協力していただけることになり、地域サポーターと同じく交流会を実施した。
- 2021 年４月　第１回交流会参加者　９人　→　現在登録サポーター　９人
  ※第１回のみ交流会とし、以後定例会として月１回実施

【地域・企業共通】

- チームオレンジコーディネーターが地域サポーター、企業サポーターで行っていることをそれぞれの定例会で報告し、情報共有している。

４．活動内容

①定例会（2021 年４月から、月１回）

・地域サポーターと企業サポーターそれぞれで定例会を実施。

②つどいの場「みかんの花」（2022 年１月から、月１回）

※2023 年５月から２ヶ所で実施

・対話をメインとしながら、脳トレ、ぬりえ、折り紙等も用意し、参加者のやりたいことをやって過ごしていただいている。本人、家族、地域の方、どなたでも参加できる場。

・スマホの使い方を支援したり、昔の映像や曲を使った回想法を行ったり、サポーターの得意なこと、やりたいことも行う。企業サポーターが参加することもある。最後に「きっともっと体操」（東海市オリジナル）を行っている。

歓談中▼

ギターの生演奏で懐メロ歌唱▼

モルック※体験▼

昔の日常生活の道具を用いた回想法▼

※モルックとはフィンランド発祥のスポーツで、点数を競うことから脳トレにもなるといわれている。企業サポーターからモルックをレクチャーしてもらい、体験した。

③知多メディアスネットワークの東海市行政広報番組で寸劇の協力（2020 年度～）

サポーターが手掛けたシナリオによる寸劇を披露（2022 年度）▲

④小学生対象の認知症サポーター養成講座で認知症の紙芝居の披露（2021 年度～）

⑤認知症の本人が働く「ちばる食堂（岡崎市）」を視察（2022 年）

⑥東海商工会議所青年部（企業サポーターが在籍）主催のイベントにブースを出展（2022 年 10 月）

・認知症のクイズのあと正解数に応じてモルック体験をする、という流れで担当を決め実施した。事前の準備、飾り付けの作成から協力してくれた。

イベントの様子▲

⑦東海ハーフマラソンボランティア参加（2022 年～）

⑧北名古屋市「回想法」視察（2023 年）

⑨その他（随時）

・企業サポーターは、個人の仕事で認知症の本人の困りごとに各々対応している。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

【地域】

- コロナ禍の中で活動を開始したが、初回の交流会以降、関係づくりをするために定例会は継続。新型コロナウィルスの感染において心配がある方は、自主的に活動を休んでいただくこととしたが、休まれる方はいなかった。
- チームオレンジの周知のために関係者、関係機関をはじめ、認知症サポーター養成講座受講者、フォローアップ講座受講者へもチームオレンジについて説明し、定例会、つどいの場の参加を促した。
- チームオレンジコーディネーターが手探りで始めた定例会だったため、その時々でテーマを決めて意見を聞いていった。数ヶ月その状態が続いたため、サポーターから「何をやりたいのかわからない」と言われることがあった。サポーターの自主性を重んじて、コーディネーターから意見を出し過ぎないようにし、方向性について明言を避けたため、サポーターをより混乱させてしまった。
- しかし、顔を合わせて対話を続けた結果、サポーターはつどいの場の運営をメインとして活動する形となり、積極的に意見を出してくれるようになった。

【企業】

- 地域サポーターと同様に、関係を作るため定例会を継続した。しかし、2021 年度に予定していたイベントがコロナ禍で中止となり、初年度活動は定例会のみとなった。
- また、企業サポーターは就業しているため、平日日中の定例会の参加率が低く、2022 年度から隔月で、夜に定例会を実施した。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

【地域】

- フォローアップ講座（東海市におけるステップアップ講座の名称）
  ＊年１回（全３回）　　＊認知症サポーター養成講座受講者を対象
- 「これからボランティア」内認知症講座（フォローアップ講座と同程度の内容で開催）
  （ボランティア活動希望者向けの市と社会福祉協議会の共同事業）
  ＊年１回（全３回）　　＊「これからボランティア」受講者を対象

【企業】

- 定例会内で企業向けフォローアップ講座を開催
  チームオレンジ定例会参加者を対象

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

- 認知症初期集中支援チームや包括で関わっている方の中で、チームオレンジに参加してもらえそうな本人に、認知症事業の情報提供、参加の声かけを行ってもらう。
- 2023 年度より本人が参加しているが、日程等わからなくなるため、個別で事前連絡、当日の連絡をしている。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・つどいの場や認知症カフェにて、本人や家族と会話し、その会話の中から希望や困りごとについて把握する。その内容について定例会で共有する。地域支援包括センターや社会福祉協議会職員にも声かけを行う。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

【地域】

・活動を重ねていくごとにチームとして連帯感ができてきた。サポーター同士連携しながら活動している。サポーターが自発的に情報提供したり、活動について提案したりしてくれるようになった。

・認知症の本人が「チームオレンジ所属」と認識してくれた。

【企業】

・チームオレンジとして、何か形になるものを作りたいと提案があった。

・啓発に関して活動の機会を提供してもらい、関係機関と繋がっている。

＜課題＞

・要望があれば、支援について検討できる体制はできているが、本人の声（希望、困りごと）が聞きとれていないこと。

・2023 年度より認知症本人の参加があり、本人の声を聞くために定例会にも参加してもらったが、活動がたくさんあり、混乱させていると感じる。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

【地域】

・サポーターがそれぞれの地域のリーダー的存在となり、各地域でつどいの場が開催され、認知症の本人、家族が相談したいときに相談できる体制ができる。

【企業】

・サポーターからの提案で、秋まつりでのボランティア活動を予定している。認知症の本人も参加予定。本人参加のチームオレンジ活動が増え、認知症に理解のある企業が増えていくことを期待している。

９．ここがポイント！

【地域】

・サポーターは男性と女性の割合が半々なので、男性も女性も参加しやすい。各々に趣味や特技があり、他のボランティアにも参加しているため、知識が豊富である。そのため、それぞれが互いに刺激を受けている様子で、サポーター自身が楽しんで活動をしている。

【企業】

・認知症事業について民間企業の視点を聞くことができる。行政、民間でできることについて、ざっくばらんに話せる関係性となり、お互いが顔を繋ぎ合うことで、人脈が広がっている。

＜愛知県から＞

・フォローアップ講座を受講した「地域サポーター」と商工会議所青年部の「企業サポーター」が、それぞれ月１回の定例会を継続していくことで、情報共有を図りながら関係性を築き、つどいの場などの活動が行われています。

・企業のサポーターとのつながりを活かし、チームオレンジを含む認知症施策全体が広く展開されることを期待しています。

チームオレンジ取組事例【大府市】
【チーム名】（チームなごみ）
【タイトル】（認知症サポーター養成講座を受けたボランティアが活躍）

1．自治体情報（2023 年８月１日現在）	
（1）人口	92,912 人
（2）高齢者人口	20,073 人
（3）高齢化率	21.60%
（4）面積	33.66 ㎢
（5）日常生活圏域	４圏域
（6）地域包括支援センター数	１箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2021 年９月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	・認知症カフェ ・人形劇
（4）活動頻度	週１回（打ち合わせ、練習等） 認知症カフェは月１回開催
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（自主財源）
（7）連携する機関等	大府市社会福祉協議会
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：１４人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 認知症サポーターである地域住民によるボランティア団体、認知症カフェ運営者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過
・認知症サポーターフォローアップ講座を受講した後、自分達に何かできることはないかとボランティア団体を立ち上げ。 ・人形劇を通して、認知症の啓発活動を行っていたが、認知症カフェも立ち上げた。 ・自治体が取り組んでいる、認知症の方本人への支援として認知症の方ご本人のつどいの参加者から、活動できる場所として依頼された。 ・認知症のご本人がチームの一員として参加するようになった。

４．活動内容
・認知症カフェ ＊日時：毎月第３水曜日　10 時～12 時　＊場所：大府市社会福祉協議会 ＊参加費：100 円　＊参加者：どなたでも利用可能 ＊内容：代表者の話、漫談、参加者の得意なこと、近況　等 ・人形劇による認知症の啓発活動 ＊認知症の人とその家族や近所の人が登場する認知症普及啓発の人形劇。 ＊講座やイベントで披露。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮
・コロナの状況に合わせ認知症カフェを開催したり、休んだりしている。 ・コロナ禍で、人形劇の活動は行えていない。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮
＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞ ・毎年１回（5 回講座）市が開催する認知症サポーターフォローアップ講座にチームのメンバーが全員参加。 ＜認知症の人本人への働きかけについて＞ ・参加しているご本人の認知症が進行しており、チームの一員としての活動を支援するが、理解力も低下し支援を一方的に受ける側になりつつある。 ＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞ ・家族はご本人が地域と繋がる場所になればと思い送り出してきたが、最近では他のチーム員に迷惑を掛けているのではないかと心配している。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・チームオレンジの活動以外での地域との関わりはないため、この場所でチーム員や地域の方との関わりをとても楽しんでおり、ここでの活動を楽しみにしている。

＜課題＞

・移動の手段の問題

・家族の協力が難しいため、チーム員が誘い合って拠点に集合している。チーム員の負担になっている。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・認知症のご本人の方で、チームなごみでの活動を希望される方がいれば案内していく。

・認知症のご本人の方を把握することが難しく、活動の活性化は難しい。

・認知症が疑われる方や、MCI、認知症初期の段階の方を把握する仕組みづくりが必要。

9．ここがポイント！

・大府市では「チームオレンジおおぶ登録事業実施要綱」を制定しています。

・市は、次の事業により、市内の「チームオレンジおおぶ」（チームオレンジのうち、要件を満たして大府市に登録されたもの）またはチームオレンジおおぶを立ち上げようとする方をサポートしています。

（1）チームオレンジおおぶの立ち上げ支援に関すること。

（2）チームオレンジおおぶが行うチームオレンジおおぶ活動の広報に関すること。

（3）チームオレンジおおぶからの相談に対する助言に関すること。

（4）その他市長が必要と認めること。

＜愛知県から＞

・人形劇を行っていたボランティア団体の活動から認知症カフェが立ち上がり、ご本人も参加されてチームオレンジへと活動が広がっています。

・メンバーが活動を楽しむことを大切にしながら、ご本人と地域がつながることのできる場を継続的に提供されており、ご本人の症状や状態に合わせて、活動が継続していくことの大切さを改めて感じました。

チームオレンジ取組事例【尾張旭市】
【タイトル】（尾張旭市認知症カフェ「かたろ～な」を拠点とした認知症予防啓発活動）

1．自治体情報（2023 年７月 31 日現在）	
（1）人口	83,935 人
（2）高齢者人口	21,983 人
（3）高齢化率	26.2%
（4）面積	21.03 ㎢
（5）日常生活圏域	１圏域
（6）地域包括支援センター数	１箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2021 年４月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア ④その他（NPO 法人、介護事業所）
（3）活動内容	認知症カフェの参加、普及・啓発活動
（4）活動頻度	・認知症カフェの参加：月１回 ・普及・啓発活動：年２～３回程度 ・全体会議：年２～３回程度
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※上記の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	地域包括支援センター（認知症地域支援推進員）
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：16 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 認知症カフェ参加者等
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	－
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過
○2014 年度 ・認知症について知識や理解を深めるための活動として年数回の認知症カフェ「ケアラーズカフェ」をNPO 法人に委託し開催を開始。 ○2016 年度 ・市内介護事業所に協力を依頼し、認知症の方、その家族、医療や介護の専門家が月に１回集う場として、認知症カフェ「カフェうさぎ」を設置。 ○2019 年度 ・NPO 法人の協力もあり、認知症カフェ「平子ふぁんふぁん」と「三郷ふぁんふぁん」の２か所が追加された。 ○2020 年度 ・４つの認知症カフェにそれぞれボランティアとして参加する市民が徐々に増えたことにより（１か所に７～８名）それぞれのカフェでの活動をもっと活性化し、認知症啓発予防活動を行う尾張旭市のチームオレンジの中心として活動できないかと考えた。 ・まずは、人材育成ということでカフェに参加しているボランティアを対象とした認知症ステップアップ研修を開催。そのチームオレンジの活動拠点も認知症カフェを活用することとした。 ・2020 年９月から講座の修了者（９名）を尾張旭市オレンジサポーターとし、チームオレンジ全体会議を開催し活動を開始した。 ○2021 年度 ・認知症地域支援推進員とともにチームオレンジの在り方を検討し、チームオレンジビジョンを作成した。 ○2022 年度 ・２回目のステップアップ講座を実施し、現在のオレンジサポーターは１６名となっている。

４．活動内容

①.カフェへの参加

（１）ＮＰＯ法人運営　「かたろ～な」ケアラーズカフェ（年３回）第２水曜日
（２）介護事業所運営　「かたろ～な」カフェうさぎ（月１回）第２水曜日
（３）ＮＰＯ法人運営　「かたろ～な」三郷ふぁんふぁん（月１回）第３金曜日
（４）ＮＰＯ法人運営　「かたろ～な」平子ふぁんふぁん（月１回）第４木曜日

- 地域包括支援センターや地域相談窓口と協働してカフェの運営や実施を月１回実施。
- オレンジサポーター会議にて「認知症カフェ」という名称だと抵抗感を感じる方もいるため話し合いを行い、名称を「かたろ～な」とした。各カフェに担当のオレンジサポーターを配置し、カフェでは主に会場設営、受付を行う。参加者への声掛けや傾聴、会場のテーブルクロスやお花を飾るなど会場を楽しく過ごせる雰囲気づくり、必要時は専門職と一緒に傾聴するなど支援している。
- カフェ終了後は各カフェでカンファレンスにて振り返りを行い、訴えや相談内容について情報共有をしている。
- 手品や季節のイベントなどを実施している。

◀認知症カフェでの活動の様子

②普及・啓発活動の参加

- 本市のイベント等で、メンバーが同じオレンジブルゾンを着用し、尾張旭市の認知症に関する取組のチラシ配布等を行っている。
- 2023 年４月は、「あさひ健康フェスタ」にて、チームオレンジのブースを設けた。「こんなまちで長生きしたい」をテーマとして、認知症の人本人が作成した折り鶴を飾りにした短冊を来場者に記入してもらい、普及・啓発を行った。
- アルツハイマー月間には、カフェに来ている認知症の本人やご家族、ボランティア、専門職等の声をまとめ市役所ロビーへ展示した。また、オレンジフラワープロジェクトとして、オレンジ色のガーベラを市役所ロビーにて尾張旭市認知症カフェマップと一緒に来庁者に配布し、参加募集の周知を行った。

普及・啓発活動の様子▼

③チームオレンジ事業の実施

・2023 年度は、３チームに分かれて事業を計画・実施している。
・2023 年７月には、男性介護者がどのような支援を求めているのか、ニーズを把握することを目的として「男性介護者の集い」を開催し、男性のオレンジサポーターがファシリテーターを務めた。同じ時間に別室でカフェを開催し、認知症の人本人と一緒に来られる形とした。
・2023 年９月には、「出張カフェ」を実施し、カフェの周知を行う。また、認知症に係る展示とオレンジフラワープロジェクトを同時開催する。
・令和５年１１月には、カフェに来られる方と地域の方が一緒に楽しむことを目的とした「ウォーキングイベント」を実施する。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

・愛知県が実施しているカフェ運営のための研修にオレンジサポーターが参加し、活動のためのスキルアップに繋げた。
・月１回のカフェ終了後に情報共有や困りごとの把握を話し合い、その問題に対し「何ができるのか」をオレンジサポーターが主体的に考えられるように、地域包括支援センターや地域相談窓口が支援をしている。まずは、オレンジサポーターがやってみようという意思を持つことを尊重している。
・チームオレンジ事業は、関係者間で目的やオレンジサポーターとの役割分担等の事前打ち合わせを行ったうえで、計画を進めた。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・2020 年度、2022 年度に各１回開催。
・対象者についてはすでに活動されている方に、リーダーとして活動の中心となってもらえるよう育成するため、カフェのボランティアを対象として実施した。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・2022 年度、愛知県が実施しているピアサポーター事業を受託し、本人交流会を行った。地域包括支援センターやケアマネジャーから認知症の人本人や家族に参加してもらえるよう声掛けを行い、参加に繋げた。
・カフェの参加者に普及・啓発で使う装飾等の作成を行っていただいた。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・各カフェでオレンジサポーターが集まり、情報共有の時間を設けており、そこで傾聴した内容について話し合い、困りごとの把握をしている。
・また、話し合いの場には地域包括支援センターや地域相談窓口の相談員が必ず入るようになっており、カフェでの困りごとの抽出を行っている。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・カフェで話を聞く中で、認知症の方の思いを知り、取り組む内容のアイデアが生まれている。（ウォーキングイベント、男性介護者支援など）

・普及・啓発活動中に認知症の方を介護していた方に出会い、人に話しづらかったことなど色々な思いを話してくれた。地域に出て同じ立場で話せるボランティアだからこそ聞ける困りごとがある。

・チームオレンジの普及・啓発を受けて、カフェに参加してくださった方がいた。

・男性介護者の集いに参加された方が「自分だけではないとわかった」と話された。介護者同士が話す場に需要があるとわかった。

＜課題＞

・自主的な活動を実施するために、チームオレンジコーディネーターの設置は必要と考えているが、現在は設置できておらず、チーム員が増えてきたことで、アイデアの具体化、実施に向けた全体会議のまとめ方が難しくなってきている。

・チームオレンジ事業を実施する際のサポーターと行政の役割分担が難しい。継続していくための検討を行う必要がある。

・認知症の人本人発信の支援。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・今まで認知症サポーター養成講座を受講し、ボランティアをやってみたいという方の受け皿がなかったが、まずはカフェに来てもらうことで、オレンジサポーター活動に繋げることが可能になった。

・認知症の人本人の思いや悩みを取り上げ、解決に向けての具体的な支援や活動ができるよう、オレンジサポーターや地域包括支援センター、行政や民間企業やNPO法人などが協働し、一つでも取り組んでいけたらと思う。そのためには、まず認知症本人が集えるような仕組みや環境の調整を行い、その窓口や拠点がカフェであり地域の憩いの場所の中心になるようにしていきたい。

・引き続きニーズを把握するとともに、よい取組を継続して行うことができるようにしていきたい。

9．ここがポイント！

・すでにボランティアとして活動している方々にオレンジサポーターとして活動して頂いているので、積極性や経験、知識があるためスムーズに活動が開始できた。

・2022年は、認知症本人の方の話を聞く機会が増え、「今、自分ができることをやってみよう」という思いから、オレンジリングを常に装着することなど身近な活動も大切だと気づきがあり、会議で具体的な活動内容について活発な意見が出るようになった。

・2023年は、普及・啓発活動以外の取組（男性介護者の集い等）を試験的に計画・実施したことで、今後の取組を検討する一助となった。

＜愛知県から＞

・ＮＰＯ法人や介護事業所が運営する４つの認知症カフェでの活動から、ボランティアを中心にチームオレンジに展開し、普及啓発活動なども行われています。

・ご本人と話し合う中で得られた気づきなどがチーム内で共有され、活動内容が広がっています。

チームオレンジ取組事例【岩倉市】
【タイトル】（いわくら認知症ケアアドバイザー会による認知症啓発活動について）

1．自治体情報（2023 年7月 31 日現在）	
（1）人口	47,835 人
（2）高齢者人口	12,104 人
（3）高齢化率	25.30%
（4）面積	10.47 ㎢
（5）日常生活圏域	２圏域
（6）地域包括支援センター数	２箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2008 年 1 月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	認知症啓発活動、認知症カフェの運営
（4）活動頻度	月２回（みんなのお家ケアドカフェ）
（5）利用料金	１回 200 円（みんなのお家ケアドカフェ）
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　）
（7）連携する機関等	市役所
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：28 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ ボランティア団体会員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	市町村職員（予定）
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

・第３期（2006 年～2008 年）岩倉市高齢者保健福祉計画及び介護保険事業計画の認知症に関する取組に位置付け、岩倉市認知症サポーター養成事業の一環として始まった。
・2007 年に市民を対象とした講座を設定し「岩倉市認知症ケアアドバイザー」を養成する。
・市内各所で認知症サポーター養成講座の講師となる活動を開始する。
・2010 年に市から独立したボランティア団体となり、市内の全小学校（５校）で認知症啓発劇を上演する。
・2011 年に名称を「いわくら認知症ケアアドバイザー会」と改め、「養成講座」「カフェ」「広報」の部会活動を始める。

【カフェ開設への経緯】
・会の目的、役割を考える中で、認知症のことを正しく理解してもらいたいとの想いから養成講座を実施してきた。それとともに、もう一つの想いとして直接認知症の方やその家族の方の支えになりたい想いがあった。
・その実現方法として、当時話題にあがってきていた「認知症カフェ」について検討を始めた。岩倉市として会員への情報提供とともに、補助金を活用し、会員に他県の認知症カフェ等にも視察に行けるよう支援した。「認知症カフェ」にもさまざまな運営形態があることを知り、自分たちのできる「認知症カフェ」を模索し、認知症の方やその家族だけでなく誰でも参加できるような現在の運営方法に行きついた。

【カフェの名称について】
・役割として認知症カフェにはなるが、来る人たちにそれを知らせる必要はないのではないか、誰もが立ち寄れる場所で認知症の方も普通に受け入れられる空間でありたいとの考えから認知症という名称を外した。地域に根付き、親しまれてきた薬局の名前をいただき「ケアドカフェ“ひろみ”」とした。2022 年５月には移転を機に「みんなのお家ケアドカフェ」と名称を変更し運営している。

４．活動内容

①認知症サポーター養成講座の開催
・保健推進員活動や一般市民向け、小学校などの要望があったところに出向き、サポーター養成講座を実施している。

②市の認知症事業の参加
・認知症に関する映画上映会や声掛け訓練など市が実施する認知症事業に参加していただき、協力をしていただいている。

③みんなのお家ケアドカフェ（認知症カフェ）の運営・実施

・隔週木曜日午後１時～午後４時まで行っている。
・認知症当事者夫婦の家をお借りして運営しており、認知症当事者の参加や複数の男性の参加もある。
・会員の中には介護に関する専門職知見を有する者や、社会経験豊富な会員が主に認知症の方の家族の相談に乗ることで家族の精神的負担の軽減や介護技術の助言、相談につながっている。

みんなのお家ケアドカフェの様子▲

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

・2021 年末に今までケアドカフェひろみが場所の都合で閉店となった。後継の場所を探す中で、カフェの目的やカフェに対する想いを会員が再確認した。
・人と人とのつながりを大切にし、それを育める場を探したいとの想いから、2022 年５月、現在のみんなのお家ケアドカフェの開店となった。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・新規会員の方がいらした時には、県が開催するステップアップ講座の受講を促している。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・認知症当事者が参加することで、他の認知症当事者やその家族が参加しやすい雰囲気となっている。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・認知症カフェを認知症当事者の自宅で行うことにより本人及び家族の困りごとを把握することができる。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・認知症カフェや認知症サポーター養成講座などで介護に関する専門的知見を有する会員や社会経験豊富な会員が、主に認知症の人の家族の相談に乗ることで家族の精神的負担の軽減や介護技術の助言、指導につながっている。

＜課題＞

・入会希望者が少ないこと。特に若い年齢の入会希望者がいないため、会員の高齢化が進んでいる。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・認知症サポーター養成講座を継続的に開催し、サポーターの数を増やしていく。
・認知症カフェが「誰かに伝えたい人」と「教えてほしい人」が自然に集まってくる場所となることで、人と人がつながり、誰もが気軽に集える場として提供する。

9．ここがポイント！

・みんなのお家ケアドカフェは、個人宅をお借りして運営しているのでとてもアットホームでくつろげるカフェです。介護について知りたい方、認知症の方やその家族、人とつながりたい方、おしゃべりしたい方、小さなお子さんからお年寄りまでどなたでも参加していただけます。男性の参加も多いのでぜひお越しください。
・みんなのお家ケアドカフェのスタッフは高齢者です。でも、侮るなかれ、介護士、ヘルパー、薬剤師、料理上手、折り紙の達人、野菜作り名人、唱歌、歌謡曲、クラッシックなんでもござれの音楽好きなど、長年培ってきたものがあります。とびきりのスマイルと朗らかな声でお越しになる皆さんと会話が弾みます。

＜愛知県から＞

・2008 年と非常に早くから活動が開始され、認知症カフェの活動を中心に認知症サポーター養成講座や普及啓発活動など、15 年近くにわたり活動されています。
・ご本人の家というアットホームな雰囲気の認知症カフェに様々な経歴の方々が集い、気軽に相談でき、楽しむことのできる場が今後も継続していくことを期待しています。

チームオレンジ取組事例【豊明市】
【チーム名】（チームオレンジちゃっと）
【タイトル】（おたがいさま活動（暮らしの困りごと支援））

1．自治体情報（2023 年4月1日現在）	
（1）人口	68,203 人
（2）高齢者人口	17,784 人
（3）高齢化率	26.1%
（4）面積	23.22 ㎢
（5）日常生活圏域	3 圏域
（6）地域包括支援センター数	3 箇所

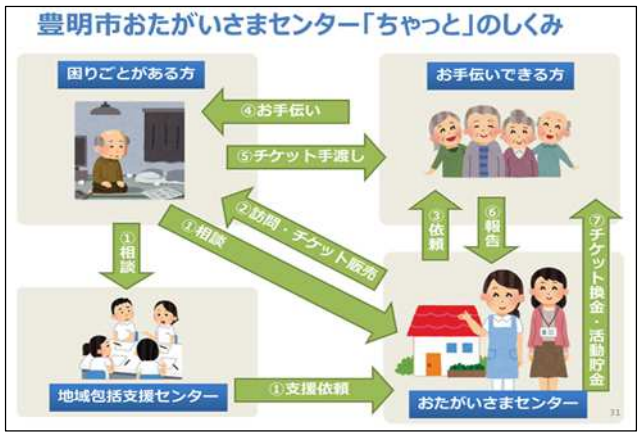
2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2017 年 11 月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（生活協同組合等）
（3）活動内容	住民主体の生活支援活動
（4）活動頻度	週５日
（5）利用料金	30 分 250 円
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※上記の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	おたがいさまセンターちゃっと（生活協同組合）
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：70 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ ちゃっとサポーター（登録された住民サポーター）
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	生活支援コーディネーター、市町村職員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

- 2011 年から「南医療生活協同組合」（名古屋市緑区）が開始した「おたがいさまシート」の取組を起点とする。「おたがいさまシート」とは困った人をサポートする取組であり、「膝が悪くてゴミが出せない」、「帰宅しても話し相手がいない」など「サポートが必要だ」と感じた人がシートを南医療生協の地域ささえあいセンターに提出すると、センターが地域の組合員にサポートを打診し、困りごとの解決を図る仕組みである。
- この取組に豊明市が着目。地域で長年支え合い活動を実践してきた「コープあいち」、「ＪＡあいち尾東」に声をかけ、2017 年４月に準備委員会を結成した後、約７か月間の準備期間を経て、「おたがいさまセンターちゃっと」を協同で設立。
- サービスを開始した 2017 年 11 月当時は、利用者数５名、生活サポーター５名の細々とした活動であったが、市の広報活動などの努力が実を結び、2023年３月現在、生活サポーター登録者数おおむね 18～85 歳の約４００名。2022度は毎月約１００件の依頼があり、生活サポーターは約１００人/月が活動。
- サポーターは、事業開始当初は組合員が主体であったが、近年は非組合員が主となり、18 歳の学生から 88 歳の高齢者までが幅広く登録し、活躍している。サポーターの平均年齢は約 63 歳（学生を除くと平均年齢は約 69 歳）となっている。
- 利用者の平均年齢は約 82 歳となっており、利用者全体のうち要介護認定者は約６割、うち認知症自立度Ⅱａ以上は約４割となっている。利用者の認知症の有無ではなく、生活サポーターは”その人”としてサポートを行っている。自然とチームオレンジの役割を担っている。

４．活動内容

【チームオレンジちゃっとのしくみ】



- 困りごとがある人（家族を含む）からのニーズの吸い上げは「地域包括支援センター」、サポーターの掘り起こしやマッチングは「おたがいさまセンター」が役割分担。
- サポートを求める人とサポーターのマッチングを行うため、「おたがいさまセンター」に地域の事情に詳しく、資源や人材のマッチングに長けた生活体制整備事業に係る生活支援コーディネーターを６名配置。

・依頼が入るとコーディネーターが依頼者のもとを訪ねて打ち合わせを行い、対応可能であると判断した場合にサポーターとのマッチングを実施。サポーターと依頼者との顔合わせにはコーディネーターも同席するなど丁寧なサポートを実施。
・生活サポーターへ年２回学習講座開催。（そのうち年１回は認知症フォローアップ講座を実施している。）
・以下のサービス内容を実施している。
①簡単な掃除、②買い物、③調理、④ゴミ出し、⑤話し相手、
⑥外出の付き添い（通院・買い物等）、⑦布団干し・取り入れ、
⑧季節物の入れ替え、⑨簡単な繕い物、⑩電球・電池交換、
⑪家具の移動（粗大ごみ出し等）、⑫簡単な家具の補修、
⑬花、植木の水やり、家庭菜園の手伝い、⑭狭い範囲の草取り、
⑮簡単な剪定、⑯その他（移送を伴う生活支援も可能）
・活動時間は 30 分単位であり、利用者は 30 分ごとに 250 円相当を自己負担する。

普段の活動の様子▼

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

・市南部を主な活動領域とする南医療生協、市北部を主な活動領域とするＪＡあいち尾東農協、市全域を主な活動領域とするコープあいちを運営主体とすることでで市全域をカバーすることに成功。
・サポートを必要とする人には、近隣のサポーターが手を差し伸べられるよう、自治会単位で、サポートを必要とする人数とそれに応えられるサポーターの人数（需給バランス）を棒グラフにより見える化。生活サポーターの数が不足している自治会に対しては、棒グラフを示し、生活サポーターの掘り起こしを地域へ依頼している。
・コーディネーターが、依頼者から丁寧な聞き取りを行うことでミスマッチが生まれにくく、継続的な活動を実現。場合によっては、医療介護関係者等の支援者と連携しながら実施している。生活サポーターは月１回報告会があり、活動の状況やサポーターの迷ったこと等相談ができる場があるため、活動も安心して継続できている。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・年１回開催、生活サポーターへ認知症に関する学習講座として、ステップアップ講座を実施。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・生活のちょっとした困りごとのお手伝いを行う。
・病院受診や買い物など一緒に同行することも可能なため、一人では不安な時に同行し安心して外出することができる。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・本人や家族の依頼、地域包括支援センターやケアマネジャーからの依頼により、困りごとの把握を行っている。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・おたがいさまセンターちゃっとの活動が広まり、依頼や生活サポーター登録数も増加している。生活のちょっとした困りごとを支えあう仕組みが広がっている。

＜課題＞

・住民周知ができていることや高齢者人口の増加に伴い依頼が増加している。そのため、サポーターも限られるため担い手不足とマッチング数の増加が課題となっている。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・生活のちょっとした困りごとを住民主体の助け合いを依頼した人もサポーターも”おたがいさま”の気持ちを継続し、さらに活動を広げていく。

９．ここがポイント！

・おたがいさまセンターちゃっとの活動は認知症の有無に分け隔てなく対応を行っている。高齢に伴い、様々な暮らしにくさを少しサポートすることで安心してご自宅での生活が続けられている。
・住民主体の取り組みであるため、利用者と生活サポーター及びおたがいさまセンターちゃっとのコーディネーターと支援内容について相談しながら、柔軟に対応を行っている。

＜愛知県から＞

・生協や農協など地域に根付いた団体と地域包括支援センターや生活支援コーディネーターが連携することで、市全域がカバーされており、毎月約 100 件の依頼にも１つ１つ丁寧な対応が行われています。

・この事例は、ご本人の困りごとに限らず、地域の支え合いの仕組みとして構築されています。

チームオレンジ取組事例【豊明市】
【チーム名】（チームオレンジまるまる）
【タイトル】（キャラバン・メイトとともに歩む希望の居場所づくり）

1．自治体情報（2023 年4月1日現在）	
（1）人口	68,203 人
（2）高齢者人口	17,784 人
（3）高齢化率	26.1%
（4）面積	23.22 ㎢
（5）日常生活圏域	3 圏域
（6）地域包括支援センター数	3 箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2021 年 4 月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア ④その他（キャラバン・メイト）
（3）活動内容	認知症カフェ、介護者のつどい、本人ミーティング事業（認知症の人と家族の一体的支援）等での参加支援活動
（4）活動頻度	月 6～7 日程度
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※上記の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	行政、地域包括支援センター、社会福祉協議会、おたがいさまセンターちゃっと（生活協同組合）
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：20 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 豊明市キャラバン・メイトまるまる
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員、 生活支援コーディネーター
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

・市主催にてキャラバン・メイトを養成。専門職と地域住民とともに”豊明市キャラバン・メイトまるまる”として 2016 年 10 月に発足。認知症サポーター養成講座の講師だけではなく、市の認知症に関する講演会の協力や認知症施策の取り組みを認知症地域支援推進員や地域の専門職と協同して推進。認知症サポーター及びキャラバン・メイトのフォローアップ講座開催等実績を重ねてきた。

・地道な取り組みにより、地域住民のキャラバン・メイトの認知症に対する理解が深まり、専門職と活動する基盤ができ、豊明市キャラバン・メイトまるまるのメンバーは、認知症カフェや健康麻雀等の地域の集いの場の運営やボランティア活動を積極的に担っている。参加者の中には、認知機能低下の人や認知症の人・家族等が混在して参加しているため、傾聴活動や運営のお手伝い、時には友人としてカフェに一緒に参加する等寄り添いながら活動を行っている。その活動そのものがチームオレンジとなっている。

・多様な地域住民と専門職が一体となり、地域の居場所の醸成や認知症に対する偏見の払拭の活動推進となっている。

４．活動内容

・地域の集いの場（認知症カフェ、本人ミーティング、地域の介護予防活動、サロン）における傾聴活動、運営ボランティア、誘いあって一緒に参加。

・認知症の人と家族の社会参加の場となっている。

◀普段の活動の様子▼

5．活動を進めていく上での工夫・配慮

・キャラバン・メイトへ行政や社会福祉協議会、地域包括支援センターによる地域活動の紹介を積極的に行い、認知症サポーター養成講座以外の活動の場に参加を促す。活動の場においては、認知症の人と家族が安心して参加継続しやすいよう寄り添い、運営の協力を行っている。
・活動における振り返りも一緒に行うことにより、地域のキャラバン・メイトのアイディアや工夫を反映し、主体的に運営ができる。
・アクティブシニアポイント※を利用し、活動にポイント還元。
※アクティブシニアポイントとは、豊明市独自の制度で、高齢者の健康増進や介護予防を促すため、「アクティブ・シニアクラブ」という愛称で 65 歳以上の市民を対象に、ボランティアとして登録していただき、豊明市が指定する介護施設等でボランティア活動をするとポイントが貯まり、１年で最大 5,000 円の商品券と交換ができるという、元気な高齢者を応援する制度のこと。

6．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞
・ステップアップ講座は年１回開催、
豊明市キャラバン・メイトまるまるの定例会は月１回開催

＜認知症の人本人への働きかけについて＞
・参加支援や傾聴、楽しむ活動への参加の促し（回想法、ウォーキング等）

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞
・専門職による相談

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞
・認知症に対しオープンに話し合える場が地域に増えた。
・認知症があってもなくても安心して活動に参加できる。

＜課題＞
・担い手の養成及びフォローアップ体制づくり。
・現役世代や企業等と連携したいが、マンパワーが少なく余力がない。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）
・困りごとからの関わりではなく、認知症カフェや本人ミーティング開催時等で認知症の人と家族とともに「楽しいこと」や「やりたいこと」を一緒に活動し、認知症に関する普及啓発をできる豊明市チームオレンジまるまるを展開していきたい。 ・希望者がいれば、豊明市の認知症希望大使を任命し、認知症に対する偏見やイメージを払拭できるような活動支援を推進、チームオレンジの活動を広く市民に伝えていくことが必要と考えている。

９．ここがポイント！
・キャラバン・メイト活動以外に地域の中で、自然と地域住民と認知症の人や家族と出会いやつながりづくりができている。支援する・支援される関係ではない出会いの場にて展開できている。

＜愛知県から＞

・地域のキャラバン・メイトと認知症地域支援推進員や地域の専門職が協働して、取組の積み重ねから認知症カフェや集いの場の運営やボランティア活動へと展開し、チームオレンジの活動が行われています。

・この事例を通して、ご本人や家族に寄り添いながら、同じ住民や友人として一緒に活動をする関係づくりの重要性を認識することができました。

チームオレンジ取組事例【北名古屋市】
【チーム名】（まあるい）
【タイトル】（「向こう三軒両隣」の心で、できる範囲でのご協力、助け合いをさせていただきます！）

1．自治体情報（2023 年７月 31 日現在）	
（1）人口	86,152 人
（2）高齢者人口	20,567 人
（3）高齢化率	23.9%
（4）面積	18.37 ㎢
（5）日常生活圏域	４圏域
（6）地域包括支援センター数	４箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2011 年１月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	お話、おしゃべり、雑談、散歩の同行、ゴミ出し、電球交換
（4）活動頻度	要相談（20 分程度/１回）
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（自主財源）
（7）連携する機関等	北名古屋市中部地域包括支援センター、社会福祉協議会
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：９人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 地域住民
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	－
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過
・2010 年度に実施した「おたがいさまねっとスキルアップ研修」（認知症サポーター養成講座を受講し、おたがいさまねっとに登録していただいた方を対象に実施している研修）を受講した方のうち鹿田地区の方が後日集まり、自分たちがやれることを考え、発足したグループ。 ・月に１回ボランティアメンバーで集まり打ち合わせ行い、数か月に１回は鹿田地区内でサロンを開催し、地域住民の交流の場となっていた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響でサロン活動は中止となり、ゴミ出し支援のみ継続していた。 ・一時は支援の対象者がいなかったが、2021 年度の「おたがいさまねっと講演会」をきっかけに地域包括支援センターと連携し、ケアマネジャーの会などで周知することができ、ゴミ出し支援の活動を再開した。

４．活動内容
・週 1 回、可燃ゴミのゴミ回収車が収集に来る前にゴミ出しを実施する。まとめたゴミを玄関の外に出すことは本人が行う。支援者が玄関の外から所定のゴミ収集場所まで運ぶ。 ・ケアマネジャーからゴミ出しの依頼があり（左足が不自由でゴミ出しが自分でできない独居男性。ゴミ出し時間が早くヘルパーによる支援が難しいため）社会福祉協議会職員、ケアマネジャーと支援者が訪問し、支援方法について確認しゴミ出し支援を開始した。 ・サロン活動は行っていた場所が改修工事しているため再開できていない。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮
・コロナ禍でサロン活動が行えず、チーム員同士で集まることもできていないので、現在は特にない。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮
＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞ ・チーム員は、市が開催するステップアップ講座等に参加されている。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題
＜効果＞ ・介護サービスでは対応できない困りごとに対応できる。 ＜課題＞ ・コロナ禍でサロン活動が行えず、地域での交流ができず、住民との新たなきっかけづくりができていない。また、チーム員同士も集まれていない。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・サロン活動を行っていた場所の改修工事が終わり、新型コロナウイルス感染症が落ち着いたらサロンを開きたい。

9．ここがポイント！

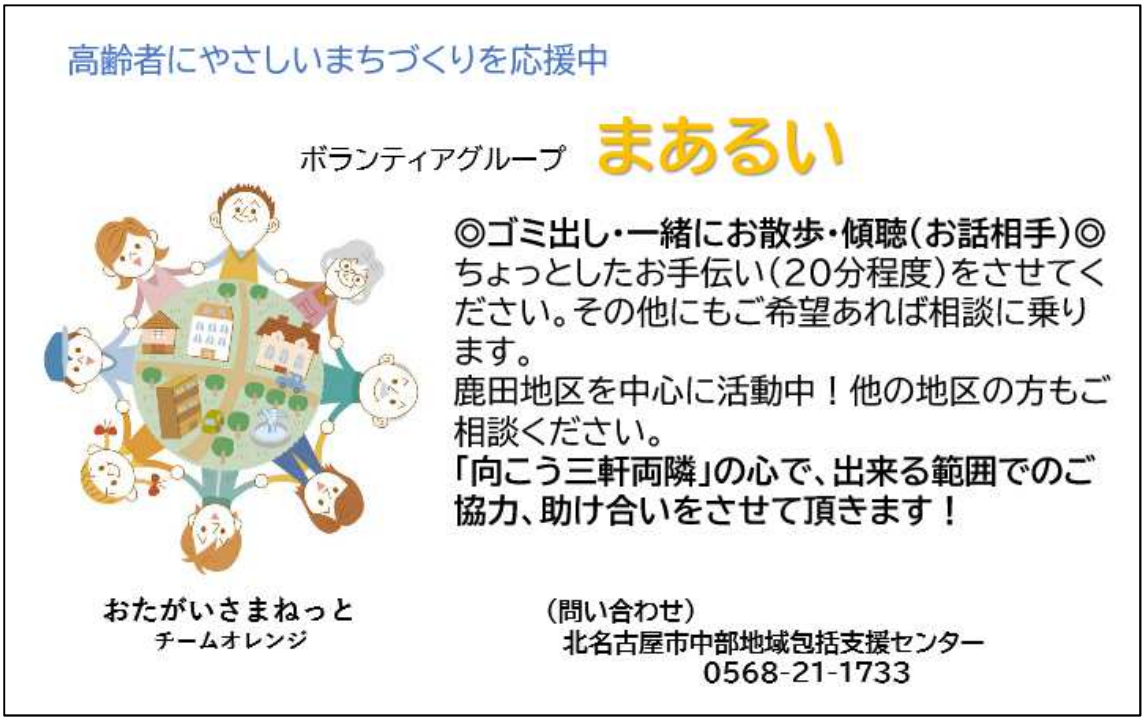
◎ゴミ出し・一緒にお散歩・傾聴（お話相手）

◎ちょっとしたお手伝い（20 分程度）をさせてください。その他にもご希望あれば相談にのります。

◎鹿田地区を中心に活動中！他の地区の方もご相談ください。

◎「向こう三軒両隣」の心で、できる範囲でのご協力、助け合いをさせていただきます！

チラシ▼



＜愛知県から＞

・顔の見える関係である地区の住民がボランティア団体を立ち上げ、社会福祉協議会や地域包括支援センター等と連携しつつ、ゴミ出しや散歩など無理のない範囲での継続した活動が行われています。

・ご本人の困りごとに限らない地域の支え合いの仕組みとしての展開やサロンの再開など、今後の活動が楽しみです。

チームオレンジ取組事例【みよし市】
【チーム名】（　チームみどりんおれんじ　）
【タイトル】（　グランドゴルフを継続できるように協力し合う　）

1．自治体情報（2023 年7月 31 日現在）	
（1）人口	61,391 人
（2）高齢者人口	11,534 人
（3）高齢化率	18.79%
（4）面積	32.11 ㎢
（5）日常生活圏域	４圏域
（6）地域包括支援センター数	４か所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年５月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	認知症になってもグランドゴルフを続けられるように声をかけたり、協力する。
（4）活動頻度	月１回
（5）利用料金	なし
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　なし　）
（7）連携する機関等	なし
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：２０人 ＜以下、チームを構成する属性を記入＞ ステップアップ講座受講者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	市町村職員、認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※参考参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

地域でグラウンドゴルフを行う任意団体があり、コロナで一時中断したが、活動を再開させたところ、認知症により活動ができなくなった参加者がいた。代表者が当該認知症の人の家族に話しを聞いたところ、本人はグラウンドゴルフを非常に楽しみにしていたが、認知症と診断を受け、自信がなくなり、他者に迷惑をかけたくないという理由で参加を見送っていることがわかった。誰でも認知症になることを考えれば、認知症にあっても楽しみであるグランウドゴルフを続けるために周囲が助け合えるようにすることが大切であると代表者が考え、地域包括支援センターに相談したことをきっかけにチーム発足へ進むこととなった。

グラウンドゴルフ仲間全員が認知症について学ぶ機会がなかったため、認知症サポーター養成講座を受講してもらい、その後、ステップアップ講座として、さらに認知症の理解を深めるとともに、認知症になっても活動を続けるためには、周囲はどのように支援すればよいか、当事者はどのようにすればよいか等々を何度もグループワークを重ねて話し合い、チーム活動のあり方を決めた。チームオレンジコーディネーターは、当該団体がある地域を担当する地域包括支援センターに配置されており、ステップアップ講座の企画から運営、発足後はチーム員からの相談を受ける等の支援を行っている。

４．活動内容

グラウンドゴルフ活動日においては、日にちや場所の見当識が薄れても続けられるように声をかけあって、家と会場の往復を複数人で行ったり、日頃から声をかけ合って体調等を把握しあうようにする。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

年に２回のフォローアップのための集会を開き、その都度、認知症の理解への復習を行ったり、チームに目的の確認を行っている。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

チーム員候補であるステップアップ講座の受講者に、どのような知識を得たいか、どのような情報が欲しいか等々をはじめに聞き取り、できる限り要望に沿うようにステップアップ講座をプランニングした。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

特別に認知症だからと区別すること自体が、当事者へのバリアになると考え、受講者全員を同一に対応した。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

認知症の人だけをピックアップして話を聞こうとすると違和感を覚えるということもあり、特段の区別をせずに（年齢的にも認知機能が低下傾向の人も含まれているため）ニーズを聞き取りした。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

まだ活動をはじめたばかりなので、目標の全員継続がどのくらいできるかはわからないが、少なくとも認知症についても理解が深まっており、認知機能が低下したことを理由に継続を拒否するようなチーム員はいないため、些細な助け合いが続くと予測される。

＜課題＞

認知機能の低下により周囲では対応が難しくなるケースが発生してくるときに、チーム員個人が自ら考えて対応策を検討できなくなるため、適切に包括等につなげられるか未知数

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

このチームの活動が他の地域の課題解決にもつながる可能性があるため、横展できるようにオレンジコーディネーターとして支援していきたい。

９．ここがポイント！

実際に、認知症の人を支援したいという集団がチームを形成しているため、学ぶ際の意欲や発足後の助け合いの様子をみていても、常に当事者の想いを意識しており、とてもよい互助活動ができている。

＜愛知県から＞

・グラウンドゴルフ仲間が認知症になったことをきっかけに、お互いに助け合いながら、仲間でグラウンドゴルフを続けたいという具体的なニーズをもとにチームオレンジが発足し、活動が行われています。

・チームの活動が地域の取組へと広がっていくことを期待しています。

チームオレンジ取組事例【東郷町】
【チーム名】（笑って楽しく）
【タイトル】（誰もが参加しやすいサロン）

1．自治体情報（2023 年７月 31 日現在）	
（1）人口	43,937 人
（2）高齢者人口	9,986 人
（3）高齢化率	22.7%
（4）面積	18.03 ㎢
（5）日常生活圏域	２圏域
（6）地域包括支援センター数	２箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2008 年５月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	体操や茶話会等
（4）活動頻度	毎週１回
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（　　） ※上記の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（　　）
（7）連携する機関等	－
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：15 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 参加者、運営者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	－
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

・サロン自体は２008 年５月から実施している。そこから認知症サポーター養成講座・ステップアップ講座を受講したのは、2021 年７月である。
・地域の高齢者の参加者が多く、お互いに支え合うために、サロンのメンバーが認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座を受講し、チームオレンジとなった。
・講義で学んだことを活かし、認知症だからと特別扱いするのではなく、誰もがお互いに声を掛け合って参加するようにしている。

４．活動内容

・運動と茶話会
＊輪の状態に椅子を並べて、サロンを行う。
＊全身を動かす、脳トレーニングになるような軽運動が中心。
＊音楽を流しながらゆっくりと体を動かせるストレッチや、徐々に強度をあげつつ軽度の椅子を用いた筋トレなどを行う。
＊運動の最中にも参加者同士で交流が図れるように 30 秒から１分の話を行う。
＊自分ペースで行えるように、適宜水分補給をとるように声をかける。
＊１時間程度の運動が終わった後、茶話会を行う。
＊「チームオレンジだから！」と意識するのではなく、自然にお互いに声を掛け合って助けあう温かい雰囲気のサロンで、誰でも参加しやすい。

運動と茶話会の様子▲

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

・連絡なくお休みの人がいた場合は、何か変わったことがなかったか等連絡をとる体制をとっている。お休みする際には、ほとんど連絡があることが多く、所属感（仲間意識）がしっかりと参加者にも根付いている。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・ステップアップ講座を開講するために、地域に出向いて教室の後に講座を行った。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・認知症の人を特別扱いするのではなく、教室の参加者がお互いに「一緒に行こう。」と声を掛け合っている。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・困りごとの把握のために、ケアマネジャーや地域包括、別の地区のサロン、家族等から情報収集を行った。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・お互いに声を掛け合って参加することで、継続して参加することができる。また新しい参加者を誘いやすい。

＜課題＞

・男性の参加者が少ないので、男性参加者を増やしたい。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・誰でも参加しやすい通いの場として、今後も展開していくと予想される。
・サロンを通して、様々な人と関わることで、地域の輪がさらに広がっていくのではないかと期待される。

９．ここがポイント！

・誰もが参加しやすく、通いやすいサロンです。初めての参加でもすぐに溶け込むことのできる温かい雰囲気です。
・笑って楽しくのスタッフは住民です。地域の耳より情報や、生活の豆知識、実はご近所さんだった！等の新しい発見や関係を作ることができます。

＜愛知県から＞

・サロンの活動をきっかけに、認知症サポーター養成講座やステップアップ講座を開催することで、チームオレンジへと展開し、活動が行われています。
・週に１回のサロンでは、体を動かす運動や１時間程度の茶話会を行い、スタッフも参加者も同じ住民として気負わず、メンバー同士が楽しく一緒に活動する雰囲気が感じられます。

チームオレンジ取組事例【東郷町】
【チーム名】（傍示本みんなのサロン）
【タイトル】（誰でも気軽に参加することが出来るサロン）

1．自治体情報（2023 年7月 31 日現在）	
（1）人口	43,937 人
（2）高齢者人口	9,986 人
（3）高齢化率	22.7%
（4）面積	18.03 ㎢
（5）日常生活圏域	２圏域
（6）地域包括支援センター数	２か所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2022 年６月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	体操や茶話会等
（4）活動頻度	第２・４木曜日（月２回）
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（社会福祉協議会からの補助）
（7）連携する機関等	―
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：25 人 ＜以下、チームを構成する属性を記入＞ 参加者、運営者
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	―
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※参考参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

・従来あった通いの場にて、自分のやりたいことについて話し合い、2022 年６月より通いの場とサロンの合同開催が始まった。2022 年 11 月、12 月に認知症サポーター養成講座・ステップアップ講座を受講した。

・誰がいつ認知症になっても、いつまでも皆で楽しくサロンを続けていけるよう、認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座を受講し、チームオレンジとなった。

・「認知症だから、チームオレンジだから」と意識するのではなく、自然と声の掛け合いや助け合いを行っている。

４．活動内容

・運動と茶話会

＊はじめに１時間程度の椅子に座って出来る簡単な運動や脳トレ等を行う。道具などを使う運動もあり、皆で楽しく和気あいあいと運動が出来ている。

＊茶話会では机を向き合わせてコーヒーやお茶菓子を食べながら楽しく話をする。

＊ボッチャや卓球等が出来るようになっており、参加者同士が自然と声を掛け合って自由に行っている。

＊童謡に合わせて簡単なリズム体操を行ったり、季節に合わせた歌を皆で声を合わせて歌っている。

＊ためになるミニ講話やお弁当の試食会、マスキングテープので桜の木を作る等のイベントを定期的に行う。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

・皆で楽しく継続して参加するために、机やいすの設置・片付けなどを協力して行っている。

・サロン以外でも連絡を取り合っており、欠席連絡等お互いの情報共有が出来ている。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

ステップアップ講座をサロンで開催し、参加者も一緒にチームとなった。

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・認知症の人だから、チームオレンジだからと意識するのではなく、参加者が自然に「一緒に行こう。」と声を掛け合っている。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・困りごとの把握のために、地域包括職員等が情報収集を行った。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・自然と声を掛け合っているので、無理なく継続的な参加が出来る。また、参加者による口コミでサロンへの参加者も自然に増えている。

・誰でも参加がしやすい雰囲気をつくっており、自由に出入りができるため、新規の人も気軽に参加しやすい。

＜課題＞

・男性の参加者が集まらない。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・今後も地域の通いの場・居場所として機能し、新しい参加者が増えることで地区の繋がりが自然と広がっていく。

・無意識に助け合うことが出来ているので、誰が認知症になっても支え合うことが出来る。

９．ここがポイント！

・地区の公民館で行っているため、来場が簡単にできます。また、自由参加型のサロンのため、気軽に参加しやすいです。

・地区の方が中心で行っているサロンのため、地域での耳より情報や、困りごとの相談なども気軽に行うことが出来ます。

＜愛知県から＞

・通いの場やサロンという身近な場所で、認知症の理解が深まり、チームオレンジへと展開しました。

・誰でも参加しやすいサロンで、認知症の人を含めた地域の人とのつながりが広がっていくことを期待しています。

チームオレンジ取組事例【蟹江町】
【チーム名】（チームオレンジ『かに組』）
【タイトル】（誰もが役割を持ち、人がつながりあえる場所）

1．自治体情報（2023 年8月 31 日現在）	
（1）人口	37,076 人
（2）高齢者人口	9,578 人
（3）高齢化率	25.8%
（4）面積	11.09 ㎢
（5）日常生活圏域	1 圏域
（6）地域包括支援センター数	2 箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2021 年 10 月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	農作業・ミーティング・個別支援、保育所の園庭開放に参加、個別支援、こども食堂の支援
（4）活動頻度	畑活動（随時）、ミーティング（1 回/月）
（5）利用料金	畑活動（無料）、ミーティング（100 円/回）
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費 ④その他（ふれあい・いきいきサロン活動助成金） ※①もしくは②と回答した場合の財源 ㋐市町村一般財源　㋑地域支援事業交付金 ㋒その他（協働地域づくり支援事業委託金）
（7）連携する機関等	あいち福祉振興会、蟹江町社協、キッズガーデン カリヨンの杜（保育所）、高齢者施設
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：約 30 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 蟹江町地域包括支援センター（認知症地域支援推進員）、あいち福祉振興会、キャラバン・メイト、当事者・当事者家族、生活支援コーディネーター、地域住民、高齢者施設職員
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員

（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

- 地域のサロンリーダーから、参加者の中で認知症の心配のある方の情報をいただくことがあった。軽度の認知症であればこれまで通っていたサロンに通い続けている方もいる。そういうサロンをチームオレンジにできないかと考えた。
- 新型コロナウイルス感染症が広がり始め、コロナ禍でも開催しやすい方法として屋外でできることはないか考え、畑活動を提案した。
- 2021 年７月に第１回認知症サポーターステップアップ講座後、チームオレンジ『かに組』（愛称：ちーかに）を立ち上げ、メンバーを募集。９名の参加者と蟹江町東西地域包括支援センターで、同年 10 月から畑活動を開始した。
- 畑は、無料で貸していただけるところを協議体等で住民に声掛けし募集したところ、町内に２か所で見つかった。元々その土地の管理を任されていた住民の方や近隣の農家の方に除草や耕作等、荒れた土地の整備にご協力していただいた。
- 2021 年 10 月 21 日、チームオレンジ『かに組』として鍋蓋・南地区の畑活動をスタート。2022 年１月から２か所目の畑活動を城地区で開始。
- 随時開催していたサポーターミーティングを、R5 年度から毎月の開催に変更。
- 毎月の広報などで活動内容や周知活動をしたり、認知症サポーター養成講座、ステップアップ講座を定期的に開催。

４．活動内容

●町内２か所で畑活動（随時）

- 野菜の植え付け、収穫の時期はそれぞれ月に２回程集まり、夏場の草取り・水やり・収穫はメンバーが各自、都合の良い時に行く。
- 収穫した野菜は、適宜メンバーで持ち帰ったり、子ども食堂協力店や施設などの行事活動で活用してもらっている。

●個別支援

- 認知症の人のちょっとした困りごとのお手伝いとして本人とサポーターをつなぎ、付き添いなどのサポートをする個別支援もスタート。Ｂ型事業所で認知症の方が作業を覚えるまでの付き添いをしたり、地域のサロンに行きたいが一人で行くことが不安な認知症の方に、近隣に住むメンバーが一緒に行くなどしている。

●月１回ミーティング

・ミーティングを、令和５年度から月１回定期開催にして、今後の活動について話し合っている。当初は保育所の地域交流室にてサロンミーティングのみ開催していたが、メンバーの集まりが悪く開催方法を変更。上記保育所での活動を行った後、ランチミーティングを行うこととなった。

●その他

・町内のイベントまつりでブースを設け、チームオレンジの広報として活動写真を展示したり畑で収穫した作物を販売した。

・保育所と連携し、園庭開放の日に世代を超えて地域交流を図っている。保育所園庭にも畑を作りはじめ、作業のお手伝いを予定している。

園庭開放

園の畑

城の畑

南の畑

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

【畑活動】

・屋外の活動となるため、苗の植える時期や天候に左右されることが多く、予定通り活動することが難しい。まだ包括主導のもと活動しているため、他の業務と重なってしまうと計画通りに活動することができない。
そのため毎日収穫しなくてはいけない作物を避け、比較的世話の少ない作物を植えるようにしている。また、活動日は予備日を設けている。

・暑さ・熱中症対策として、夏場の活動は控えるように声掛けしている。地域包括支援センターの勤務時間内は暑い為、地域住民のサポーターメンバーが活動される場合は、早朝や夕方遅い時間で短時間にするようにお願いしている。地域包括支援センター職員は日中の空いた時間に作業を行う。雑草が生い茂るため、除草剤の散布や除草シートを敷いて対策している。

【メンバー間の交流】

・メンバー間の親睦を深めるため、畑活動の後に“お花見ランチ会”を開催。新規のメンバーの参加もあった。秋は収穫したサツマイモで焼き芋パーティーを計画中。普段、少人数で集まることが多い為、メンバーが多く集まるような企画も検討している。

・登録しているサポーターメンバーが増えてきたため、グループラインを活用し連絡事項や活動報告をしている。
・畑活動は重労働でもあるため、活動時にはお茶やお菓子を準備し休憩時間を設けるようにしている。

【生活支援コーディネーターとの連携】
・2022 年度以降、社協の生活支援コーディネーターがステップアップ講座を受講し、メンバーとなった。

【認知症サポーターへの働きかけ】
・これまで、地域包括支援センターは、町内団体から依頼があった場合のみ認知症サポーター養成講座を行ってきた。しかし、コロナ禍で依頼がほとんどなくなったため、地域包括支援センターから年に２回、認サポ講座を開催。広報誌などで募集を呼びかけ、個人での申し込みができる様にした。また、認サポ講座後にステップアップ講座を設定し、参加を呼びかけている。
・毎年行っている民生委員・児童委員懇談会でも、認サポ講座、ステップアップ講座の案内をした。

【活動が軌道に乗るまでの試行錯誤】
・積極的に活動していただけるサポーターメンバーが少なく、包括から声をかけていかないと活動ができていない。考え方に温度差があるなどまだまだ、軌道に乗ったとは言えない状況。課題も多いがゆっくりすすめればいいこと、勢いに乗ったほうがいいことなど、しばらくは地域包括支援センターが舵取りしていく必要がある。
・畑を２か所で始めたが、サポーターメンバーが少なく、メンバーだけで管理するのは難しい。職域サポーターや畑のご近所住民の協力も必要と考え、広報誌に募集の呼びかけやチラシを作成し、サポーターメンバー以外の参加メンバーもあまり条件は設けず広く声掛けを行い、参加者は少しずつ増えている。
・また、町の共同地域づくり支援事業やサポーターミーティングをサロンとして申請することで活動費を確保。除草シートを購入し、草取りの負担を軽減することで、少人数でも畑活動を維持しやすいようにした。
・上記の認知症サポーターへの働きかけにより、毎年数名ずつサポーターメンバーが増えているが、畑を維持していく為にはまだまだ参加メンバーが少ない。
・ケアマネからや包括が支援に入っている本人やご家族に声掛けをしている。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・年に１回、８月ごろに開催。
　対象者は蟹江町在住・在勤で認知症サポーター養成講座受講済みの方。
　認サポ講座を受講していなくてもステップアップ講座受講後に認サポ講座を受講する条件で、ステップアップを受講できるようにした。

＜認知症の人本人への働きかけについて）＞

・広報誌やチラシ上では認知症の方が参加できる活動であることを明記。
・サポーターメンバーのご近所や知り合いの中で、認知症の方で参加できそうな方は一緒に連れて来ていただくよう話している。
・ケアマネや民生委員の方からも紹介してもらったり、情報提供していただくようにお知らせしている。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・畑で作業しながら相談に乗ったり、話を聞いたりすることもある。
・包括支援センターが支援する方やケアマネからの相談、また認知症カフェやケアラーズカフェの参加者からの相談などでも把握する機会がある。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・放置された空き地や畑を活用できる。
・ご近所さんが畑のことを心配し、覗いてくれたり、水を補充してくれたり、除草剤を撒いてくれたりと、メンバー以外の地域住民とのつながりが自然に発生している。
・畑周辺の地域では地域の方も協力してくださるようになり、地域の子供が水やりを手伝ってくれたり、農作物の成長を見守り一緒に収穫したりするなど、幅広い年齢層が参加するようになった。
・地域包括支援センターが参加していることを知り、畑活動の時に介護の相談にご近所の方がみえた。
・少しづつ地域の方に活動が知っていただけるようになり、問い合わせの連絡が入るようになった。
・施設の職員の方も参加してくださるようになり、今後の状況次第で利用者の方も一緒に活動していただけることになった。
・個別支援を少しずつ始めている。

＜課題＞

・サポーターメンバーからやりたいことや意見が出るようになってきたが、ちーかに活動としての考え方にずれがある場合がある。意見を聞きつつ、継続的な活動として包括が調整・主導している状態。

・夏の畑活動は、雑草の処理や水やり、収穫が追いつかない状態。作業負担を軽減する工夫をしたが、２か所の畑を管理するにはサポーターメンバーの人数が不足している。
・認知症の方の参加が少ない。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・サポーターメンバーや畑のご近所の住民さんの参加者が増え、サポーターメンバーそれぞれがリーダーになって、自分の自宅のある地域で小規模の畑活動を行う。町内のあちこちに小さい畑ができ、手入れが行き届かなくなって放置された畑の活用もできる。
・あらゆる年代の人が参加。認知症の人だけでなく、障害のある人も、小さい子ども連れのお母さんも気楽に参加できる。
・栽培した野菜を販売して、種や苗、肥料などを買う分の収益が得られる。
・収穫した作物を活用し、地域住民の方やサポーターメンバーでイベントを行う。
・畑活動やちーかにサロンがサポーターメンバーと認知症の方の出会いの場となり、個別支援に繋がっていく。

９．ここがポイント！

・畑活動は野菜の収穫だけが目的ではなく、農作業が初めての人も、そこに集まったり、誰もが自分ができる範囲で役割を持ったりすることができる。野菜を枯らしてしまっても、採るのが早すぎても、何か間違えても誰かに怒られたりすることもない。自分のタイミングで参加することができる。人とかかわるのが苦手な人も、畑活動に参加しながら少しずつサポーターメンバーと顔見知りとなり、打ち解けていく事ができる。
・時間に制限がないため、自分の都合の良い時に行って帰ってこられる。作物の成長や収穫を楽しむことができる。
・参加の最低条件は蟹江町在住・在勤であることだけ（実は蟹江町に何らかのご縁があるならそれでいい）。小さな畑を中心に、誰でも人とつながりを持つことができる活動です。

＜愛知県から＞

・感染症が流行しても交流や活動がしやすい屋外の畑での野菜の栽培がチームオレンジの活動として行われています。
・また、畑を介して畑の近所の住民の方や地域の子供（ともにメンバー以外）など幅広い年齢層との交流が広がり、空き地や畑の有効活用など周辺地域を巻き込みながら活動が行われています。

チームオレンジ取組事例【東浦町】
【チーム名】（オレンジパラソル）
【タイトル】（オレンジパラソルによる認知症予防啓発運動）

1．自治体情報（2023 年７月３１日現在）	
（1）人口	50,185
（2）高齢者人口	12,949
（3）高齢化率	25.8%
（4）面積	31.14 ㎢
（5）日常生活圏域	３圏域
（6）地域包括支援センター数	１箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2013 年４月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	ボランティア団体による認知症予防啓発運動
（4）活動頻度	定例会月１回 その他の活動については不定期
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費 ④その他（学校での認知症サポーター養成講座の謝金）
（7）連携する機関等	―
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：10 人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 地域住民
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

- 認知症サポーター養成講座、認知症サポーターフォローアップ講座を受講した有志で2013 年に結成。講座で学んだことをより多くの人に知っていただき、認知症への理解を広め、認知症の方が地域で暮らしやすいまちになることを目指して啓発活動をしている。
- 毎年認知症サポーター養成講座、認知症サポーターフォローアップ講座を受講した方が参加している。

４．活動内容

- 会員間の認知症の理解を深めるとともに、住民に向けた認知症予防の啓発運動を実施。
- 認知症予防カフェの開催や認知症について分かりやすく理解していただくための劇を町内で実施される認知症サポーター養成講座や各種イベント等で実施。
- 2017 年度から町内の小学校４年生、中学校１年生全員を対象とした認知症サポーター養成講座において「物盗られ妄想への対応」「行方不明高齢者への声かけの仕方」の劇を実施。劇を通して子どもたちへの認知症理解のための啓発活動に力を入れている。
- 国立長寿医療研究センターが実施する、互いに褒め合うことで認知症予防につなげる研究に、サポーター自身が参加し、協力している。

認知症サポーター養成講座での劇の様子▼

5．活動を進めていく上での工夫・配慮

- 学校やサロンの認知症サポーター養成講座については、地域とつながりのある生活支援コーディネーターが認知症サポーター養成講座の講師となり、そこで対応劇を行っている。
- 動画や講義だけでは分かりにくい部分を劇で行うことで、特に子どもや高齢者に分かりやすく伝えることができている。
- 認知症サポーター養成講座やステップアップ講座内で活動を PR している。
- アルツハイマー月間でのイベントに参画していただき、認知症への理解を広げる人材となっている。

6．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

- 町民向けのステップアップ講座を年１回実施。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

- 難しい病気の症状への対応を具体的な劇にすることで、特に子どもや高齢者に分かりやすく伝えることができている。
- 動画とは違い、現場で直接で行うことで相手に伝わりやすい。
- 活動はメンバーのやりがいにもなっており、その姿勢が周りにも伝わり、認知症の理解を広げる活動への温かい気持ちが広がっている。

＜課題＞

- 認知症への正しい理解を持った上で劇などの活動を行っており、参加へのハードルが高く活動参加者を獲得しにくい。
- 理解者や活動者を増やすための周知の場が少ない。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- 地域で認知症カフェを行うなど、チーム員自身が地域に出て認知症理解を広めていきたい。また、活動の幅を広げていきたい。
- 認知症になってもお互いさまで生活できるような地域づくりのため、啓発活動を行っていきたい。

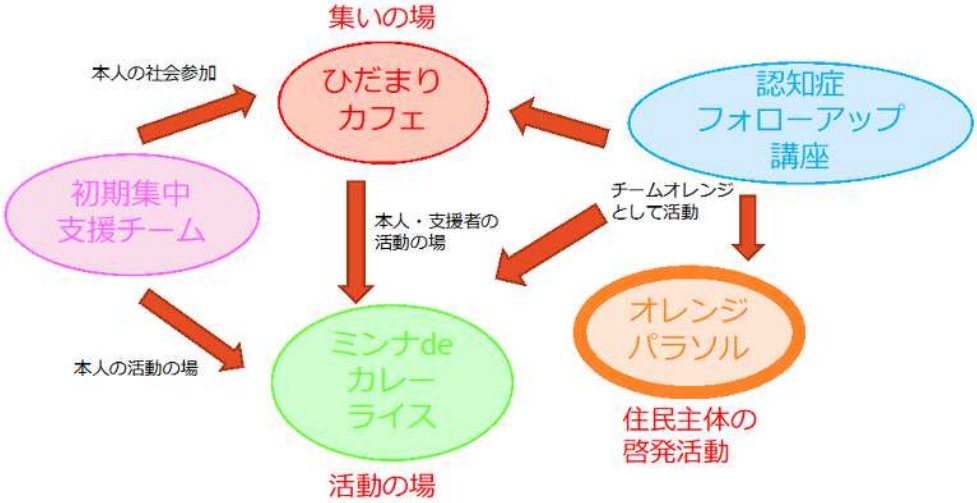
9．ここがポイント！

- 認知症について学び、認知症の方と暮らしていくために地域での認知症理解を深めること、認知症の方の手助けをしてくれる人を増やすことが必要と考えた想いのあるメンバーが集い、同じ地域に住む住民として同じ目線で認知症について語ることで、より地域の理解、共感を得ることができている。

＜愛知県から＞

- 2013 年と早い時期から活動を開始され、町内の全小中学校やイベントなどで、認知症に関する劇を上演し、町全域に根付いた活動が行われています。
- 劇という形にすることで講義や動画だけでは伝わりにくいことや難しい病気の症状なども分かりやすく伝えられています。

（参考：東浦町における３つのチームオレンジの役割）



チームオレンジ取組事例【東浦町】
【タイトル】（ひだまりカフェ（認知症カフェ）のお手伝い）

1．自治体情報（2023 年７月 31 日現在）	
（1）人口	50,185
（2）高齢者人口	12,949
（3）高齢化率	25.8%
（4）面積	31.14 ㎢
（5）日常生活圏域	３圏域
（6）地域包括支援センター数	１箇所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2016 年５月開始（ひだまりカフェ開始時）
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	社協主催の認知症カフェのお手伝い
（4）活動頻度	毎週水曜日
（5）利用料金	無料
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	①市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費 ④その他（介護保険保険者からの事業費）
（7）連携する機関等	東浦町社会福祉協議会
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：２人 ＜以下、チームを構成する属性を記入＞ 地域住民
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※＜参考＞参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ③　その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

- 2016 年度、次年度からの総合事業開始に向けて、従来の東浦町生きがい活動支援通所事業「ひだまり」の一部として認知症カフェ「ひだまりカフェ」を開設。
- 認知症カフェへの移行に伴い、ボランティア活動者がカフェでの話し相手や、ゲーム等の補助、カフェでの配膳等の活動を行うようになった。
- 社会福祉協議会が、東浦町の「認知症対策推進業務」の委託業務として実施。社会福祉協議会内にある東浦町高齢者相談支援センター（包括支援センター）のサテライト機能を担う。
- 「ひだまりカフェ」には認知症地域支援推進員が参加し、運営を行う。
- 年１回は「ひだまりカフェ」で認知症サポーター養成講座を実施。

４．活動内容

- 「ひだまりカフェ」

＊日時：毎週水曜日午前９時 30 分～11 時 30 分

＊場所：東浦町福祉センター１階　にじいろひろば

＊内容：脳トレやレクリエーション、麻雀やゲームの補助、会話の仲介
認知症当事者や介護者への声かけや見守り、相談の受け止め、
認知症地域支援推進員との情報共有、連携支援　等

普段の活動の様子▼

5．活動を進めていく上での工夫・配慮
・活動者が元福祉専門職という強みを活かし、相談対応や声かけを行っている。 ・2019 年度、認知症サポーターステップアップ講座内にて、活動者自らが受講者に活動内容の紹介を行い、ステップアップ講座受講者に参加の働きかけを行った。 ・東浦町社会福祉協議会や東浦町高齢者相談支援センター（地域包括支援センター）のサテライト機能を担っているため、気軽な相談の場となりやすい。 ・相談等を受けた際は認知症地域支援推進員と共有し、必要時は相談機関につないでいる。社会福祉協議会の認知症地域支援推進員はコミュニティソーシャルワーカーも兼務しており、認知症以外の様々な相談事も必要な支援機関につなぐことができる。 ・ボランティアという特性を活かし、参加者にはできる限り何でも自分でやっていただくこととしている。 ・支える側、支えられる側の立場の差なく、お互いに支え合う仲間として認知症カフェ参加者とつながるようにしている。 ・若年性認知症の人もカフェに参加しており、その方が楽しめる麻雀などを取り入れながら、参加しやすい雰囲気づくりを行っている。

6．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮
＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞ ・活動者が元福祉専門職という強みを活かし、相談の受け止めや声掛けを行っている。 ・相談機関のサテライト機能を担っているため、相談等を受けた際は認知症地域支援推進員と共有し、必要な支援機関につないでいる。

7．活動に取り組んで見えてきた効果・課題
＜効果＞ ・主催運営側の社会福祉協議会職員とは異なり、参加者や認知症当事者と同じ目線で接しているため、日常的な相談を受けやすかったり、認知症当事者の変化に気づきやすかったりする。 ・参加者と世代が近いため、“じぶんごと”として老いや認知症を受け止めやすく、共感的な声かけや相手に配慮した支援を行うことができることで、心地のいい場所づくりに寄与している。 ・活動者自身も自分の生きがいや参加の場と感じており、介護予防につながっている。 ＜課題＞ ・ボランティアは活動を始めやすいが、活動の継続性を担保することが難しい。そのため、活動者が固定化しやすい。 ・認知症カフェ参加者のみへの支援のため、自宅に引きこもっている方やつどいの場には出てこない方とのつながりを持つことが難しい。 ・活動者と専門職の意見交換の場、認知症介護に関わる専門職への周知。

8．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

- 活動者は地域住民でもあるため、認知症カフェに参加されている方と、カフェ外でも気安くかかわりを持ちやすい。認知症カフェ以外での参加者の生活の状況を見知ったり、話を聞いたりする機会がある。認知症カフェ以外でも、今後は地域の見守りサポーターとして活動してもらうことができると考える。
- 認知症サポーターフォローアップ講座の実施方法を検討することで、認知症カフェを身近なものとし、参加メンバーを増やしていくことができると考える。
- 認知症カフェ参加者も、同じ目線で集う仲間としてメンバーに加わっていただく。

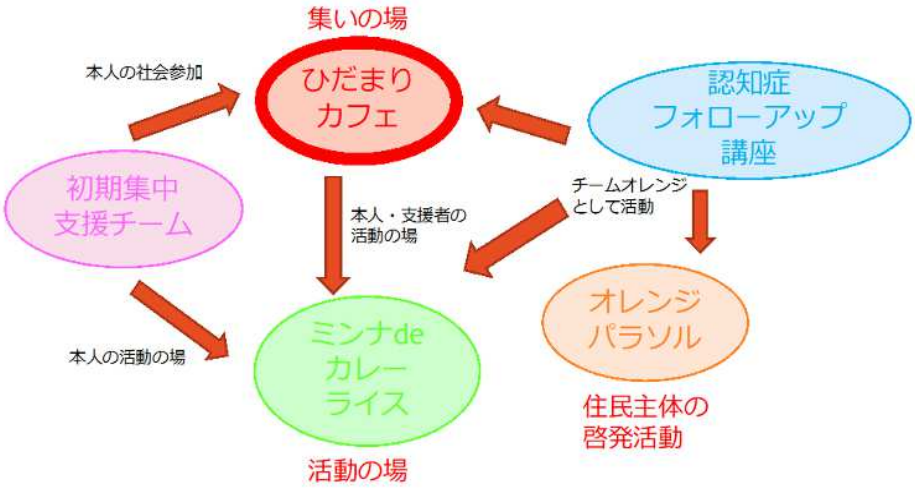
9．ここがポイント！

- 現在活動している方は元福祉専門職であるため、話の聞き取り方や会話の仲介能力、本人の状態変化の気づきの目線が、専門職視点である。また、年齢は参加者に近いため、老いや認知症の受け止め方が参加者視点であることから、認知症地域支援推進員と参加者の良い仲介役となっている。
- カフェという気楽な空間で話すことができることで、日常会話の中に当時者の課題や強みを見出し、課題解決や強みを活かす取り組みにつなげることができる。
- 社会福祉協議会の認知症地域支援推進員がコミュニティソーシャルワーカーも兼務しているため、認知症以外の相談でも必要な相談機関へのつなぎや伴走支援につなげることができる。

＜愛知県から＞

- 早くから活動を開始しており、認知症カフェでのレクリエーションや相談など心地のよい雰囲気で活動が行われています。
- 同時に、元専門職のスタッフやコミュニティソーシャルワーカーを兼務する認知症地域支援推進員がいることに加え、地域包括支援センターのサテライト機能を担っていることで、気軽に相談を受け、必要に応じた支援機関へつなげることができています。

（参考：東浦町における３つのチームオレンジの役割）



チームオレンジ取組事例【東浦町】
【チーム名】（　ミンナ de カレーライス　　）
【タイトル】（　認知症当事者とオレンジサポーターによる社会参加活動　）

1．自治体情報（2023 年７月３１日現在）	
（1）人口	50,185 人
（2）高齢者人口	12,949 人
（3）高齢化率	25.8%
（4）面積	31.14 ㎢
（5）日常生活圏域	３圏域
（6）地域包括支援センター数	１カ所

2．活動の概要	
（1）活動開始時期	2023 年４月開始
（2）活動実施主体 （当てはまるものに□）	①市町村　②地域包括支援センター ③住民・ボランティア　④その他（　　）
（3）活動内容	カレーライスづくり、一般住民への提供
（4）活動頻度	月１回
（5）利用料金	200 円
（6）運営財源 （複数回答可） （当てはまるものに□）	③ 市町村からの委託　②市町村からの補助 ③会費・参加費　④その他（介護保険者からの事業費）
（7）連携する機関等	
（8）メンバー（チーム員）構成	チーム員：８人 ＜以下、チームを構成する属性＞ 地域住民
（9）チームオレンジ コーディネーターの属性	認知症地域支援推進員
（10）チームオレンジの類型※ （当てはまるものに□） ※参考参照	①第１類型（共生志向の標準タイプ） ②第２類型（既存拠点活用タイプ） ③第３類型（拠点を設置しない個別型タイプ） ④その他（　　）

３．活動の立ち上げの経緯と経過

・２０２３年３月、認知症カフェの参加者同士のつながりを生かし、お互いがお互いの役に立つことができる機会を作れないかと考え、調理であれば誰もが関われるのではないかとカレーライスづくりに着目した。

・認知症カフェ参加者の方（当事者とサポーター）、認知症地域支援推進員が関わっている高齢者、認知症介護者、ひきこもりの方に声掛けし、活動の趣旨に賛同していただけた方と２０２３年４月、第１回ミーティング実施。活動説明と認知症サポーター養成講座を行い、認知症に関する理解を深めた。

・２０２３年５月、第２回ミーティングとしてメンバー８名で試作会を実施。材料、役割分担、時間配分等を話し合い、20 食作る場合のシュミレーションを行い、職員向けプレオープンの準備を行った。

・２０２３年６月、第３回ミーティング（職員向けプレオープン）実施。10：00 に集合し調理スタート。11：30～12：30 に提供することができ、メンバーの負担もなく実施できることの確認ができた。メンバーでの試食の際には、反省会も行った。認知症当事者の方も意欲を持って参加できており、家族からも感謝の言葉が出た。

・一般向け提供のための検便実施。（認知サポーター養成講座受講済者と検便実施者がクッキングサポーターとなる）。検便実施者５名。

・２０２３年７月、「ミンナ de カレーライスオープン」。２０食完売。味などの反省点はあったものの、順調に出発。

・認知症初期集中支援チーム員会議ケースの方に対する取り組み紹介や参加促し。

・地域住民に対して材料提供の声掛け（ジャガイモ、きゅうりの提供あり）

・認知症地域支援推進員は、メンバーが役割を楽しめる機会となるようにコーディネートしている。

４．活動内容

・月１回カレーライスづくりをし、一般住民に提供する

・クッキングサポーター（調理担当）、ホールサポーター（配膳担当）、イートサポーター（カレーライスを食べに来てくれる方）、PR サポーター（活動のPRしてくれる方）というように、誰もが役割を持ち、活動に関われる仕組みを設けている。

・サポーター同士でカレーライスを食しながら、活動やメンバー間の情報交換などをし、交流も行っている。

５．活動を進めていく上での工夫・配慮

・誰もがサポーターになれるという仕組みを作ったことで、活動へのハードルを下げることができており、何時からでもできるサポーターになれるようにしている。
・それぞれの都合があることを理解し合い、お互いに支え合い、楽しく活動していくことを確認しながら取り組みを進めている。
・夏休みなどには小中学生も関われるようにすることで、多世代交流する場にもなり、サポーターもモチベーションが上がっている。

６．「チームオレンジ三つの基本」に関する工夫・配慮

＜ステップアップ講座の開催する頻度や対象者について＞

・年１回

＜認知症の人本人への働きかけについて＞

・認知症が進み自信を無くしている本人がカレーライスづくりを通して、自分のできることを再確認したり、家族に認められたことで自信を取り戻せたりしており、その喜びを共感し合う。

＜認知症の人本人やその家族の困りごとの把握について＞

・介護者にも声掛けし、一緒にカレーを食べるなどしてコミュニケーションを図り、困りごとなどを吐露できるような工夫をしている。
・本人が活動に参加している間、介護者は本人と離れる時間が作れることでストレス軽減になっている。

７．活動に取り組んで見えてきた効果・課題

＜効果＞

・取り組みを始める前は自身の物忘れを気にしていたが、カレーライスづくりが始まってからはいきいき表情もよくなり、ご主人からも褒められるようになった。

・カレーライスを食べにくる一般住民の方との関りや、様々なサポーターの方との関りが増え、やりがいを感じている。

・サポーターになりたい方には「認知症サポーター養成講座の受講」を勧めるようにしているため、この取り組みを知ることで認知症への理解が深まることにもつながっている。

・カレーライスを食べに来た当事者が活動者として活動に加わることになった。

＜課題＞

・当事者の方の参加継続。

・サポーターが増えた場合の活動回数の検討。

８．今後の活動展望（期待・予想される結果など）

・当事者が参加しやすい仕組みをさらに検討し、当事者の方、地域の方が自然に交流できる場となるようにしていく。この取り組みがプラットフォームとなり、様々な方が「この取り組みなら役割を感じられて楽しそう！」と思えるように活動を継続していく。

・この取り組みの仕組みを使って地域展開し、歩いて行ける場所でもこの取り組みが行われ、認知症の人が社会参加しやすくなるようにしたい。

９．ここがポイント！

・調理は誰にでもできること。その調理を通して、認知症の人もサポーターも交流ができる。そのことが生きがいややりがいにもつながっている。

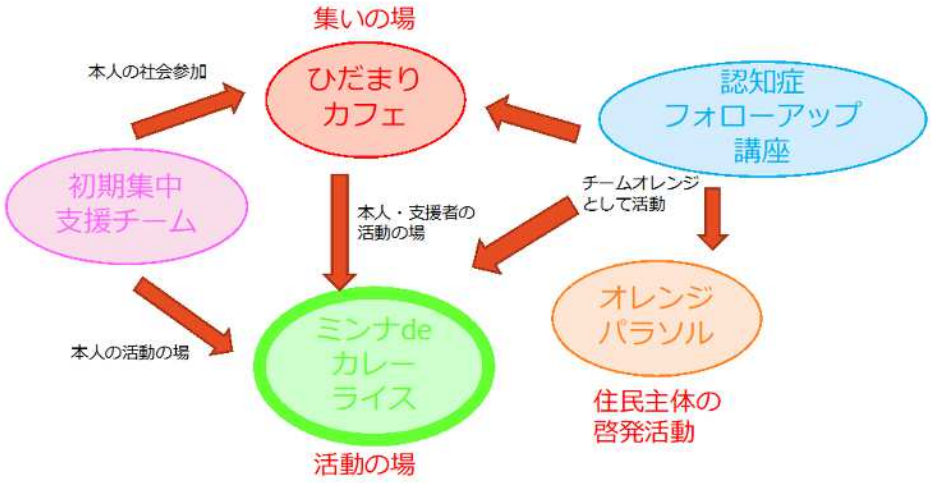
・取り組みの中に様々な役割（サポーター設定）があることで、取り組みへの参加しやすさがあり、知らない間にサポーターになれるという、誰もが一体感を感じられる取り組みです。

＜愛知県から＞

・調理、配膳、食事、PR などを通してご本人、サポーター等の誰もが役割を持ち、活動に関われる仕組みになっています。

・みんなで作ったカレーを一緒においしく食べるという楽しい雰囲気が伝わってきます。

（参考：東浦町における３つのチームオレンジの役割）



＜参考＞

〇チームオレンジの類型について、地域特性や拠点の確保等の理由から以下の特徴的な３類型を参考にチームオレンジを立ち上げます。
（全国キャラバンメイト連絡協議会発行「コーディネーター研修テキスト　認知症サポーターチームオレンジ運営の手引き」から抜粋）

・第１類型【共生志向の標準タイプ】：地域の交流拠点（より所）を設置
＜特徴＞
＊サポーター等の活動の拠点であると共に、認知症の人と家族などが、いつでも訪れたりできる普段からのより所とします。認知症の人の社会参加へのハードルが低くなります。
＊共に集うことにより、サポーターと認知症の人との「顔見知り」「なじみの関係」が成り立ちやすく、認知症状の変化や、困りごと等のマッチングと支援の迅速な対応が可能です。
＊拠点は集まりやすい立地を選ぶことが重要です。
＊コーディネーターは、チームオレンジ立ち上げ後は、チームのスーパーバイザー的役割での参加となります。
＊サポーター以外（サポーター予備員）の多様な人々の参加を前提とする地域共生拠点への発展が望めます。

・第２類型【既存拠点活用タイプ】：既にある拠点の活用
＜特徴＞
＊既に拠点がある「まちなかサロン」や「認知症カフェ」「介護予防教室」などをチームオレンジとして活用する方法です。
＊拠点の設置者や運営が介護事業者等の法人の場合は、住民サポーター主体の運営へシフトさせ、法人との協力関係の整理の必要があります。
この場合、まず、チームオレンジの三つの基本の整備から始めます。介護事業従事者はつながりの職域サポーターとして、あるいは住民サポーター（ステップアップ講座修了）として、法人は連携する関連機関として活動をすることなどの整理が必要になります。
＊既にサポーター主体で運営されているサロン等に関しては、チームオレンジ〇〇サロンへ移行できます。この場合であっても、サポーターのステップアップ講座修了と三つの基本の整備は必要です。
＊既存の活動とチームオレンジの活動を並行して行う場合の整理として、既存の活動をチームオレンジのメニューとして存続させる方法があります。

・第３類型【拠点を設置しない個別支援型タイプ】

＜特徴＞

＊活動拠点が確保できない場合にも実施できる方法です。

＊既存のサロンや認知症カフェなどへチームメンバーが訪問し、活動・支援することも考えられます。

＊集う拠点がないため、認知症の人の社会参加の機会が少なくなります。

＊サポーターや認知症の人、家族等との交流の機会が少ないため、困りごと支援のマッチングのための情報収集と調整に時間と手間が生じる可能性があります。

＊チームメンバー同士のコミュニケーションがとりづらいため、LINE やメール等を活用した運営が望まれます。

＊かつての「やすらぎ支援員」制度に類似しています。

＊チームリーダーの力量が求められ、チームオレンジ運営の難易度は高いと思われます。

愛知県版チームオレンジ事例集

2020 年 11 月発行
2022 年 12 月更新
2023 年 11 月更新

愛知県福祉局高齢福祉課地域包括ケア・認知症施策推進室

住　　所　〒460-8501　名古屋市中区三の丸三丁目１番２号
電　　話　052-954-6310
ホームページ　https://www.pref.aichi.jp/soshiki/chiikihoukatu/